筑波大学附属図書館特別展

江戸前期の湯島聖堂

―筑波大学資料による復元研究成果の公開―

筑波大学附属図書館特別展

江戸前期の湯島聖堂

―筑波大学資料による復元研究成果の公開―

凡例

一．本書は、平成17年10月8日から30日を会期として、筑波大学附属図書館で開催される特別展「江戸前期の湯島聖堂　ー筑波大学資料による復元研究成果の公開ー」の展覧会図録である。

一．図版には原則として作品番号、名称、数量、材質、技法を付した。

一．図録中の作品番号と陳列番号は一致する。ただし、陳列の順序は必ずしも番号順ではない。

ごあいさつ

筑波大学は筑波研究学園都市に開学して30年余のまだ若い大学ですが、大学が経てきた前身校からの歴史は古く、その伝統の証しは伝えられた収集資料のなかに脈々と受け継がれています。

そのひとつが湯島聖堂ならびに昌平坂学問所の資料群です。明治時代に入って聖堂址に開学した本学ならではの収集品は江戸時代の教育を知る貴重資料と考えます。展覧会では本学が受け継いだ湯島聖堂・学問所の誇り高い、歴史ある文化財を展観するとともに、資料の失われた部分を復元し開廟当初の礼拝空間を再現しようとするものです。

筑波大学は、幅広い学問分野を有する総合大学ですが、前身校以来の伝統を持つ芸術学分野が他の様々な学問分野と連携しつつ特色ある教育研究活動を展開していることも大きな特徴です。このたびの学術資料を活用したビジュアルな研究成果の公開も、本学の特徴を生かした新しい試みです。

また、展覧会で学術研究の一端を示した本展は、江戸前期湯島聖堂の礼拝空間を復元しようとする試みを更なる学術研究へ結びつけることを意図した、研究型総合大学ならではの研究公開と言えます。

美術館とは一味違う展覧会のかたちをどうぞご覧ください。

筑波大学長　岩崎　洋一

筑波大学附属図書館特別展

江戸前期の湯島聖堂

—筑波大学資料による復元研究成果の公開—

展覧会実行委員会

委員長	林　史典（副学長・教育担当）
副委員長	植松貞夫（附属図書館長）
	西川　潔（芸術専門学群長）
委　員	玉川信一（人間総合科学研究科教授・芸術30周年記念事業実行委員長）
	西原清一（附属図書館副館長）
	星野雅英（附属図書館副館長）
	菅原英一（附属図書館情報管理課長）
	富田健市（附属図書館情報サービス課長）
制作委員	守屋正彦（人間総合科学研究科教授・展覧会企画担当）
	柴田良貴（人間総合科学研究科教授・彫塑制作担当）
	藤田志朗（人間総合科学研究科教授・日本画制作担当）
	木村　浩（人間総合科学研究科助教授・CG制作担当）
附属図書館	緒方恭子（主査）
特別展WG委員	篠塚富士男
	大久保明美
	岡部幸祐
	落合厚子
	市野塚浩子
	平田　完
	船山桂子
主催	筑波大学附属図書館
	筑波大学芸術専門学群
後援	史跡湯島聖堂財団法人斯文会
	財団法人三菱財団

ごあいさつ

筑波大学附属図書館は、平成七年以来毎年特別展を開催してまいりましたが、このたびは創設三十周年を迎えた芸術専門学群との共催により「江戸前期の湯島聖堂―筑波大学資料による復元研究」を開催することとなりました。

附属図書館には、明治5年開設の師範学校以来引き継がれ保管されてきた貴重な資料が多数蓄積されています。そしてこれらの貴重な資料についても学内研究者等の研究素材として活用されてきています。今回の特別展においては、美術的・歴史的に価値ある湯島聖堂関係資料を、聖堂の礼拝空間を復元するための調査・研究という新たな視点から活用した復元研究成果とともに、展示しています。資料の収集・整理・保存を受け持つ図書館が、このような特別展を通じて図書館資料そのものと、資料を活用した研究成果の双方を広く情報公開することにより、図書館の活動と筑波大学の研究の一端を多くの皆様にご理解いただくとともに、さらなる研究の進展を促す契機となることを願っています。

展覧される皆様が図書館と研究者の連携による広がりをもった研究の可能性を感じていただき、また本学と湯島聖堂を結ぶ歴史の流れに思いを馳せていただければ幸いです。

筑波大学附属図書館長
植松　貞夫

筑波大学芸術専門学群・大学院は開学して30周年を迎えました。その間に芸術理論、美術、構成、デザインと多岐にわたる分野において大学教員、研究者、作家、デザイナーなど、斯界を代表する人材を輩出してきました。おかげさまで芸術に関する有数の教育・研究機関として今日を迎えましたことは望外の喜びであります。

このたびの展覧会は、芸術教員組織による学術資料の活用、また理論と制作が一体となった総合的な研究成果の公開という、筑波大学ならではの企画であります。理論による調査と、実際の制作を通しての試行錯誤を経た研究は、これからの新しい芸術研究のあり方、また学際研究の可能性を広く問うものと考えております。

ご来場くださった皆さまには、本展において、湯島聖堂にかかわる筑波大学の伝統的収集品ならびに復元制作をご覧いただき、わずかとはいえ、開かれつつある新しい歴史の風を感じていただければ幸いです。

最後になりましたが、ご後援をいただきました三菱財団、斯文会をはじめ本展にご協力、ご支援をいただきました学内外の皆様に厚くお礼申し上げます。

筑波大学芸術専門学群長
西川　潔

江戸前期湯島聖堂研究の意義

今井　雅晴

1　筑波大学芸術学系（人間総合科学研究科）の研究グループの活躍

筑波大学は、そのもとをたどれば江戸時代初期の1630（寛永7）年、上野忍岡に設けられた林羅山の家塾に始まる。翌々年、尾張藩主徳川義直は林家の家塾内に聖堂を寄進した。聖堂は孔子廟ともいう。儒学の祖である孔子を祀った廟だからである。儒学の諸賢も祀られている。（儒教という用語もあり、儒学と儒教とはその内容が必ずしも完全には重なっていないが、本稿では両方を合わせて「儒学」とする）。

この忍岡聖堂は、1691（元禄4）年に林家の家塾とともに神田の湯島に移されて湯島聖堂と称されるようになった。さらにこの家塾は拡充されて昌平黌と呼ばれるようになる。そして1797（寛政9）年には江戸幕府が直接運営する学問所となった。のち、この学問所は昌平坂学問所となって明治時代に入り、曲折を経て東京高等師範学校、東京文理科大学となる。第二次大戦後の1949（昭和24）年には、他のいくつかの専門学校と合わせて東京教育大学となった。さらに二十数年後には筑波大学となり、今日に至っている。

このような歴史から、湯島聖堂のなかの礼拝空間を飾っていた絵画等の美術資料や、それに付随する資料が筑波大学附属図書館に伝来している。そのなかには狩野山雪筆「歴聖大儒像」や「賢儒図像」14面(2面欠失)の後世の写しがあることは世に知られていた。そしてつい最近の2000（平成12）年、狩野探幽筆の「野外奏楽・猿曳図」屏風と狩野尚信筆「李白観瀑・剡渓訪載図」屏風等が発見された。

附属図書館では2000年5月に収蔵品の特別展を開催した。その図録が『筑波大学附属図書館所蔵　日本美術の名品』である。この特別展の開催にあたっては、準備のために芸術学系所属で日本美術史を専門とする守屋正彦教授（筑波大学の組織の改組再編により、現在の所属は大学院人間総合科学研究科）を中心とする方々に加えて、同学系の大学院生や大学の内外の方々も協力して調査研究を行なった。この調査の過程で前記屏風等が発見され、マスコミへの発表も行なわれた。その記者会見には当時の北原学長と守屋教授、そして筆者も出席した。

本学附属図書館には他にも優れた所蔵品が多いが、これら儒学の湯島聖堂に関する資料は、本学として内外に誇るべき重要な宝である。今後も大切にし、また研究を進めていかなければならない。その重要な宝であるべき所以は、以下に述べる。

2000年の特別展の後も守屋正彦教授をリーダーとし、同じ研究科の藤田志朗教授（日本画）、柴田良貴教授（彫塑）、木村浩助教授（情報、CG）および研究員・大学院生7名の方々がチームを組み、湯島聖堂に関する美術史と芸術学が協力した研究を精力的に続けてこられた。筆者は日本文化史が専門であり、その観点からもこれらの資料の重要性に気づいており、守屋教授からは折に触れて研究状況をうかがっていた。

守屋教授をリーダーとする研究グループは、2003（平成15）年度の三菱財団人文科学分野研究助成を得て、その研究成果を『美術史料による江戸前期湯島聖堂の研究　研究報告集』（『日本美術研究』特別号、制作は守屋教授の研究室である日本美術史研究室）として出版した。本書には美術史領域、日本画領域、彫塑領域、CG領域からの十数点もの論文と報告書が収められている。図版多数を含んだそれぞれの綿密で充実した成果は、読む者を圧倒する。筑波大学附属図書館所蔵資料を手がかりとした、まさに美術史と芸術学のコラボレーションの研究成果である。本書全体が湯島聖堂の研究につながっていることを承知しつつ、特に湯島聖堂に焦点を当てている論文と報告書の題名を挙げれば、以下のとおりである。

「湯島聖堂の賢儒図像扁額の研究―筑波大学所蔵《賢儒図像扁額本》を通しての考察」（中根恭子氏）

「旧湯島聖堂大成殿内の孔子像に関する一考察」（伊藤たまき氏）

「《湯島聖堂釈奠図》について」（横島菜穂子氏）
「旧湯島聖堂大成殿孔子像の復元研究」（中原篤徳氏）
「バーチャル湯島聖堂」（木村浩氏）
「旧湯島聖堂大成殿孔子像復元制作報告書」（柴田良貴氏、中原篤徳氏）

ここで注目したいのは、かつて湯島聖堂の大成殿に存在した孔子像の研究である。この孔子像は、惜しくも1923（大正12）年の関東大震災で焼失してしまって、現在では見ることができない。しかしそれをさまざまな角度で研究することによって、意外で注目すべき事実が浮かび上がってきた。

2 仏師に作らせた孔子像

湯島聖堂を美術史の観点から研究することは非常に重要である。実際のところ、その内部の様子についてはいまだ判明していないことが多いからである。湯島聖堂は、江戸時代の社会において大きな役割を果たした儒学、そのなかでも江戸幕府と諸藩に支配教学として採用された（と考えられてきた）朱子学の大元締めであるからである。聖堂のなかでも、孔子を祀る行事である釈奠はもっとも重要である。そして江戸時代においては全国各地に孔子廟が設けられ、幕府の意を受けた林家が主催する釈奠は、各地の釈奠の手本となった。そしてそれが幕藩体制の思想的基盤となっていったからである。

特に江戸時代の後半になるけれど、儒学では仏教を嫌った。仏教に対抗し、仏教の欠点をあげつらう廃仏論が盛んに行なわれた。儒学の中でも、幕府の官学とされた林家が主張する朱子学ではなおさらであった。ところが最近、新出資料によって、湯島聖堂大成殿の釈奠の中心となる孔子像は京都七条仏所第23代康音の制作であることが判明したのである（三山進「近世七条仏所の幕府御用をめぐって―新出の資料を中心に―」『鎌倉』第80号、1996年）。その資料は次のとおりである。

一、寛永九年上野弘文院
　五聖人御木像奉為彫刻、極粉色玉眼入
　孔子御長弐尺壱寸中尊
　脇立　子思　顔子　曽子　孟子　四躰御長弐尺
　右者前尾州大守大納言様被為仰付候
　　調進大仏師廿三世左京法眼康音作

資料中、寛永9年は西暦1632年、「上野弘文院」は忍岡の先聖殿、「前尾州大守大納言様」とは尾張藩の前藩主徳川義直のこと、「大仏師」は仏像を制作する技術者集団である仏師たちの統率者としての職である。全体の文意は、「徳川義直の依頼によって、京都左京七条にある仏所の大仏師第23世である法眼康音が、上野忍岡の林家聖堂奉祀の孔子および子思、顔子、曽子、孟子という五体の儒教の聖人たちの木像を制作した」というものである。

京都七条にあった仏像制作所ともいうべき七条仏所は、歴史的にもっとも重要な役割を果たしてきた仏所であるということができよう。もとは平安時代に一時代を築いた仏師である定朝の弟子覚助に始まる。定朝は、いわずと知れた宇治平等院の阿弥陀如来座像を制作した仏師である。覚助の系統のうち、奈良に本拠を置いた者たちのなかから康慶・運慶父子や、快慶、定慶等の名手が輩出して慶派と称された。彼等は京都七条へ進出して七条仏所を形成し、南都（奈良）では興福寺大仏師職、京都では東寺大仏師職を相承した。彼等は中世である鎌倉時代から室町～戦国時代から近世の江戸時代に至るまで、仏像彫刻界の主流を成していたのである。

七条仏所は、いわば中世以来の日本仏教を土台から支えてきたということができる。その七条仏所に、幕藩体制の一翼を担う徳川義直が儒学の孔子像の制作を依頼し、林家側もそれを受け入れている。前掲資料で使用している用語も、「中尊」「脇立」等、仏教でなじみの深い用語である。しかも『美術史料による江戸前期湯島聖堂の研究　研究報告集』による諸研究を見れば、中国以来の孔子像の当然の

姿である立像あるいは倚座像（椅子に座る）ではなく、胡座像（あぐら）であったことが示されている。

すでに焼失してしまった湯島聖堂の孔子像は、座像で、両足を組み、両膝が横に張り出したあぐら（胡坐）であったらしいこと、また同じく焼失した他の諸賢像の同様であった可能性が高いのである（伊藤たまき氏、前掲論文）。

また、その後の江戸時代の長い歴史の中で、林家はその孔子像を一度も入れ替えることをしていない。通説的にいえば、仏教を嫌っていたはずの儒学が、これはどうしたことであろうか。つまりは儒学と仏教との関係、ひいては江戸時代の支配教学に関する通説を再検討しなければならないということである。

3　官学としての朱子学のありかた

むろん、江戸時代の幕藩体制下における儒学、中でも通説では幕府初期からの官学とされた朱子学のあり方について検討がなされてきた。その成果によれば、朱子学が官学として広く認められるようになったのは、松平定信の寛政異学の禁（1790〈寛政2〉年）以降という、ずいぶん遅い時期からのことである（佐藤弘夫他編『概説日本思想史』ミネルヴァ書房、2005年）。そして江戸幕府は儒学による仏教排斥を政策的に実行したこともなかった。考えてみれば江戸幕府は寺檀制度を確立して有効な支配手段としていた。儒教の学者が仏教を批判する言説を出したとしても、また岡山藩や水戸藩で仏教寺院の破却・整理が行なわれたけれども、それは個別散発的な事象に過ぎないといえる。それに、例えば水戸藩の仏教寺院弾圧は、藩財政の悪化の建て直し策の一環として寺院所有地を収公する意味合いが強かったのである。徳川光圀は儒学に傾倒したけれども、僧侶の友人も多かったことを知るべきである。

ちなみに光圀の伯父である徳川義直も儒学を家中に奨励し、寛永年間の初めにその居城である名古屋城のなかに聖堂を作っている。

江戸幕府は中世以来のさまざまな宗教勢力・思想を支配体制確立と維持のために利用したということである。そして、このことについては、思想的な観点からの研究が先に進んでいるということである。

4　湯島聖堂研究の意義

しかしながら、守屋教授をリーダーとするグループの精力的な研究により、湯島聖堂に焦点を当てる美術史から江戸時代史研究に大きな発言ができるのではないかということが判明した。これは非常に重要なことである。そのためには美術史と芸術学および歴史学・思想史とのコラボレーションが必要となるということである。

たしかに、朱子学研究を軸とする儒学研究の思想史上の成果は貴重である。ただ、その思想が展開する基盤である儀礼空間、それを構成する絵画・彫刻群の研究は遅れていたのである。少なくとも、江戸時代前期の社会全体を理解する上での意味づけはほとんどなされてこなかったといってよいであろう。ところが、寛政異学の禁以降ではあっても、幕府の官学とされた朱子学の本拠である湯島聖堂には、仏師が仏像制作のイメージをもって制作した孔子像が安置されていたのであり、その前で釈奠が江戸時代を通じて行なわれていたのである。筆者は、美術史および芸術学にはそれ自体の研究目標があるということは十分に承知している。しかし今回の湯島聖堂の研究は、美術史および芸術学の枠を超えた、広く重要な意味があるといわなければならない。

筆者の立場からいえば、日本史学と美術史学との緊密な連携はずっと以前からの理想であった。そして個別的にはそれを実行してきた。その観点からいえば、今回の研究の成果（いまだ研究途中の成果であるが）は非常にうれしく思ってきた。そしてその成果が大きく江戸時代前期の歴史の研究にも重要な意味を持つことが明らかになったのは、さらにうれしいことである。この研究のいっそうの発展を期待して筆を止めることとする。

（いまい　まさはる：人文社会科学研究科教授、日本語日本文化学類長）

湯島聖堂の復元

特別展《江戸前期の湯島聖堂》、その考え方

守屋正彦

忍岡聖堂は林羅山（1583－1657）の私邸に徳川義直(尾張候)の援助で1632(寛永9)年にいまの上野公園忍岡に建てられた。湯島聖堂はその後身。同地より孔子像を移し、1691(元禄4)年に現在の地、御茶ノ水に創建された。したがってタイトルの湯島聖堂と羅山とは時を一つとして語ることはできないが、什宝を移し、私邸の管理を改め、幕府による新聖堂建立となった。その礼拝空間は基本的には忍岡時代の礼拝像を受け継ぎ、改めて整備しなおしたものであった。

さて、本展開催のきっかけは2000年5月の狩野探幽等の新出屏風を公開した特別展「筑波大学附属図書館所蔵日本美術の名品」にはじまる。公開した資料の中には湯島聖堂の大成殿に掛けられた《歴聖大儒像》6幅、それは忍岡時代から続く孔子を祀る祭壇に掛けられた宋儒の肖像画があり、さらに《賢儒図像》の扁額14面、後世の写しが伝えられていた。あわせ考えると湯島聖堂を飾った画像は筑波大学附属図書館に伝えられ、それを根拠に礼拝空間の復元研究がはじまったのである。

1　江戸前期の湯島聖堂の礼拝空間を飾った筑波大学資料

草創期の湯島聖堂は一体どのような礼拝空間、諸像が配祀されていたのであろうか。『昌平志』の聖廟図（図2）では、祭壇上には孔子像と四配の彫刻。背後の壁面に《歴聖大儒像》が左右それぞれに3幅、計6幅が掛けられている。またこの図には記されていないが正面壁を除いて入り口に到る左右両壁には《賢儒図像》の扁額16面が掛けられていた。

孔子像ならびに四配は向かって右から「思(子)」「顔(子)」「文宣王（孔子）」「曾（子）」「孟（子）」の順に並んでいた。これらの彫像は尾張初代藩主義直が林羅山のために造像したもので尾張藩の聖廟に祭られている孔子像と同一の作家による。また、祭壇上には十哲の木主が並んでいたことも明らかであるが、これは位牌を意味し祭壇両端に縦列していたことが確認できる。これらのうち彫像また扁額は関東大震災で罹災し消失し、忍岡時代から今日に現存する肖像は《歴聖大儒像》6幅のみである。ただ《賢儒図像》の扁額については筑波大学に松谷天来模写、扁額下絵14面が、墨書きの画稿で伝えられている。

筑波大学で所蔵する《歴聖大儒像》六幅は祭壇後壁の両翼に向かって右から邵子、程叔子、周子、祭壇を挟み、向かって左側に右から程伯子、張子、朱子が掛けられ、とくに痛みのない状態を察するに、孔子の祭典にかかる行事以外は常設せず大切に管理され収納されていたものと考える。

2　失われた諸像の復元のための調査

江戸前期湯島聖堂の礼拝空間を考察するために、本研究では美術理論と美術制作、CG制作による研究組織を構成し、まず失われた礼拝の諸像を補う試み、いわゆる復元制作を進めていった。最初の着手は《賢儒図像》扁額16面に相当する筑波大学模写本14面（筑波大学では《賢聖障子図》として所蔵）を補完する、失われた2面の復元であった。これらの復元に関しては扁額が湯島聖堂開廟当初に狩野益信が描き、それが1703（元禄16）年11月に自身による大火事によって大成殿、学舎が焼失。扁額も焼失して翌年に大成殿が再建され、狩野常信が制作したものとの記録がある。このため賢儒肖像に関する文献及び絵画資料を通覧、その過程で東京国立博物館所蔵の常信筆《賢

哲図像》2巻を熟覧するに至り、巻末に「浅草文庫」印を見出して、湯島聖堂のおそらく旧蔵資料であると推定。松谷天来本との照合において筑波大学本が東京国立博物館本2巻と酷似したものであることが確認できた。このことにより礼拝空間における絵画としての肖像については壁面を完成できる資料を得たことになったのである。

また礼拝の中心として位置する孔子及び四配の彫像はそれまでの記録から1923(大正12)年の関東大震災で聖堂が罹災し、全焼するまで存続したものであることが想定できた。これを根拠に写真資料を調査し、また写真と同形式の孔子像について照合し、尾張徳川家の聖廟安置の孔子像が湯島聖堂と同一の作者であることが記録より明らかとなったのである。

3 復元研究の成果

研究は筑波大学所蔵の賢儒像扁額模写本(《賢聖障子図》)、湯島聖堂安置の孔子像、釈奠についての3つの観点から資料調査を行い、美術史による検討を加え、その結果を反映して、扁額の失われた2面と湯島聖堂の孔子像ならびに四配像の復元を進めた。ただ、その成果は正確に典拠できるデータがないため、多くは推論の上に想定され、完全な復元とはいかないが、研究を進める過程で顕著な成果を得た点が特筆できる。

図1　東京国立博物館での調査

たとえば東京国立博物館所蔵の狩野常信筆《賢哲図像》2巻の調査では、筑波大学の扁額模本が狩野常信による扁額の写しと想定できたことであり、これによって将来的には色彩を施した扁額復元の可能性を示したといってよいであろう。本巻末には《歴聖大儒像》の幅背と同様の「浅草文庫」印が見られ、《賢哲図像》が湯島聖堂の旧蔵にかかる資料であったことが認められ、扁額の複本としての性格が強いものと認められ、次第に失われた儒者の肖像の特徴が明らかとなっていった。また、扁額模本に描かれた像は明時代の粉本よりも、わが国においては宮中などで描かれた古典的な聖賢図に近く、その流れを重視したものと推論できる(1)。

正殿安置の孔子像については胡坐像であることが決め手となり、調査の結果、徳川義直が注文主であることから名古屋城の孔子像と湯島聖堂に残された写真図版に見る孔子像が同様の手と見られ、七条仏所の仏師康音作であることが明らかとなった(2)。このことにより、元禄以降に各地に聖堂が建てられ、安置された孔子像の様式と比較するに及んで、湯島聖堂の孔子像ならびに四配像は仏師による古典的な様式を受けついだものと解釈できた。具体的にいうならば、胡坐による木彫像は中国的な気分を示す閑谷学校や多久聖廟の孔子像に比較して、日本的な表現、仏像制作に倣うわが国の伝統的な肖像彫刻の流れを汲むものと言える。

このことから江戸前期湯島聖堂の諸像は当時影響した明時代の図様よりも、室町時代からの伝統を踏襲したと解釈でき、礼拝空間が与えるイメージは儒教による支配を強烈にアピールしたものではない。古典イメージを継続させた背景には、幕府あるいは羅山による江戸時代のヒエラルキー生成の過程での配慮が造形上働いたと仮説できるであろう。

4 ビジュアルイメージから考える林羅山

宋の時代の儒教は儒仏道の三教一致思想を背景としている。我が国の禅宗美術はその影響を受け、水墨画に「三教図」や「三酸図」、道釈人物画が描かれている。これを受けついだ江戸の狩野派は室町水墨画を下地に探幽らが新しい構図で幕府の御用を行った。また江戸初期の儒教は室町時代からの大陸

のありかたに倣い、絵画で見る限り排他的な儒教観に立っておらず、中世からの重層的な宗教文化の展開の上に、江戸の儒教が展開したと見ることができよう。たとえば林羅山は『東照新廟記』、『東照宮三三回忌』などを著し、また『増上寺法会記』や『大樹寺法会記』、『武州王子社縁起』など社寺記を記し、『神社考』、『神道秘訣』など儒教とは無縁の仏教や神道にかかわる著作を手がけている。また『軍書題説』、『剣術諺解』、『百戦奇法抄』などの兵学、『和漢詩歌合』、『源氏物語諸抄年月考』などの詩文や和歌、『武門姓氏考』や『鐘銘纂』など多様な論考をあげることができ、先に示した湯島聖堂の礼拝像も含め考慮するならば、従来指摘される儒教一辺倒の剛直な思想家とは考えがたいところである。

これと関係があるところでは例えば参考資料として本展に出品した《剡渓訪戴図》について、これが旧昌平坂学問所にかかわる資料であるかは現在のところ判明できていないが、羅山は『蒙求』を熟読し、その注釈書『蒙求鼇頭』(3)を著し、彼が「子猷尋戴」の故事をよく知っていたことと符合している。『蒙求』は儒教の書ではなく、少年を対象とした啓蒙書でとくにわが国では「孫康映雪」が有名である。「子猶尋戴」の故事は『林羅山詩集』(4)巻29「雪中」に、御題「山雪」の項に「前山寒色後山浮」と歌われ、この説明中に「訪戴図、四山詩」とある。また同書の御題「浅雪」に「坐来纔見履痕霑誰催剡水扁舟棹」とあり、説明に「晋書王子猷居山陰雪夜眠覚開室酌酒忽憶戴安道即乗船訪之于剡渓云々」とある。さらに「竹雪」に「花飛庭前自有此君愛縦訪戴逵須早帰」、その解説に「子猷訪戴逵」とあるなど禅僧がかって詠じたことに倣うように儒教に拘泥しないあり方が指摘できる。《剡渓訪戴図》は探幽の弟、狩野尚信が描いており、図様の典拠は狩野元信筆《雪中山水図》(妙心寺霊雲院旧方丈襖絵、六曲一双)左隻に求められる。それは禅宗美術における室町水墨画が儒、仏、道の思想を内包し、それらがそのまま近世絵画の画題というテキストなっていったことを意味するとともに、近世の儒教絵画が羅山の詩文と同様、図様を検閲するような排他的で狭量な詮議をしなかったと解釈できる。

湯島聖堂の礼拝空間の諸像、また『蒙求』に典拠した羅山の詩、それと関連したと見る《剡渓訪戴図》などの表象資料が示すところは仏教的色彩から乖離せず、幕府による儒教の採用、これによるヒエラルキーの思想形成は古典様式が示すとおり、江戸幕府による儒教の導入は穏やかで時代の差異を感じさせないような武家への浸透が行われたものと考える。

5 おわりに

礼拝空間のビジュアルイメージまた伝来の表象的資料から、江戸前期の湯島聖堂のあり方を美術史的な観点から論じたが、本稿において仮説を示し、解釈を行った研究視点は周辺諸学からの学際的な検討が加えられたものではなく、その点では美術領域における研究提案の域にとどまっている。わたしが展覧会開催を企画した意図はこの様な美術理論による狭隘で一面的な解釈に限界を感じ、また周辺諸学との横断的な協議がきわめて重要と考えたからに他ならない。さいわい三菱財団研究助成で構成した研究組織は学術振興会の基盤研究費を得ることで復元研究の精度をさらに進展させることとなった。このたびの研究途次での公開は本研究に対するレビューを期待してのことであり、またこの分野の学術研究のあり方の可否は大学が行う展覧会という俎上でこそ確認できるものと判断したからである。忌憚ないご叱正を賜りたい。

注

(1)中根恭子「湯島聖堂の賢儒図像扁額の研究―筑波大学所蔵《賢儒図像扁額模本》

を通しての考察―」平成15年度三菱財団研究助成『美術史料による江戸前期湯島聖堂の研究・研究報告集』筑波大学日本美術史研究室2005

(2)伊藤たまき「旧湯島聖堂大成殿内の孔子像に関する一考察」平成15年度三菱財団研究助成『美術資料による江戸前期湯島聖堂の研究・研究報告集』筑波大学日本美術史研究室2005

(3)上代から南北朝に至る言行録。唐の李翰によって746年頃までに成立。現代の流布本は宋の徐子光による補注本。四字句により、上2字が人名、下2字が行状の形式を取る。

(4)『林羅山文集』下巻、京都史跡会編、ぺりかん社　昭和54年。

（もりや　まさひこ：人間総合科学研究科教授）

研究協力
中根恭子　　筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科5年
伊藤たまき　筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科5年
渡邉晃　　筑波大学大学院人間総合科学研究科　博士特別研究員
横島菜穂子　筑波大学大学院人間総合科学研究科　非常勤講師

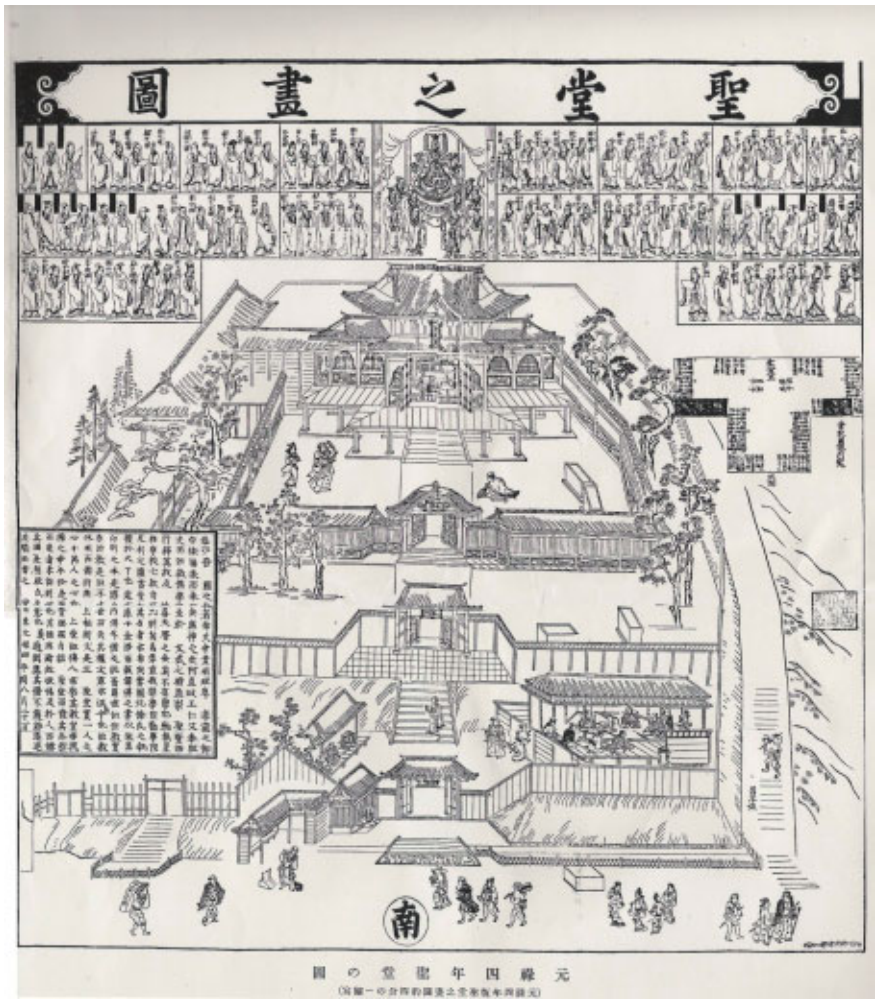


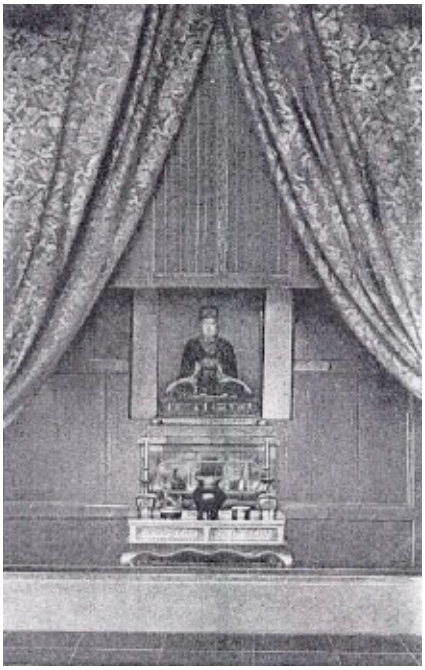
図2『昌平志』の聖廟図

孔子像および四配像の復元と、その調査から制作まで

柴田良貴

大正12年の関東大震災により失われた旧湯島聖堂大成殿孔子像および四配像の復元は、江戸前期に創建された当時の礼拝空間について考証していく上で、大きな役割を担うものである。現在まで、旧湯島聖堂の研究において、孔子像・四配像の造形的観点からの考察は充分に行われておらず、今回の原寸大の想定復元は他所に例をみない試みである。また、具体的に聖堂内部を考えていく上でも重要なものになるであろう。本復元の目的は、儒教思想の中心に位置する彫像である孔子像・四配像の全体像を捉え、造像の様子を考察し、当時の礼拝空間を想定していくことにある。なお、今回の孔子・四配像の復元は調査・研究と並行して展開していくという流れであったため、形態を自由に変化させることができ、新たに追加されていく様々な考察に対しても柔軟な対応ができる可塑材が適切であると考え、塑造による制作となった。出展されている復元作品は塑造原型による石膏像であり、中間素材としての要素が強いものであるが、これは更なる今後の研究を見据えたものである。

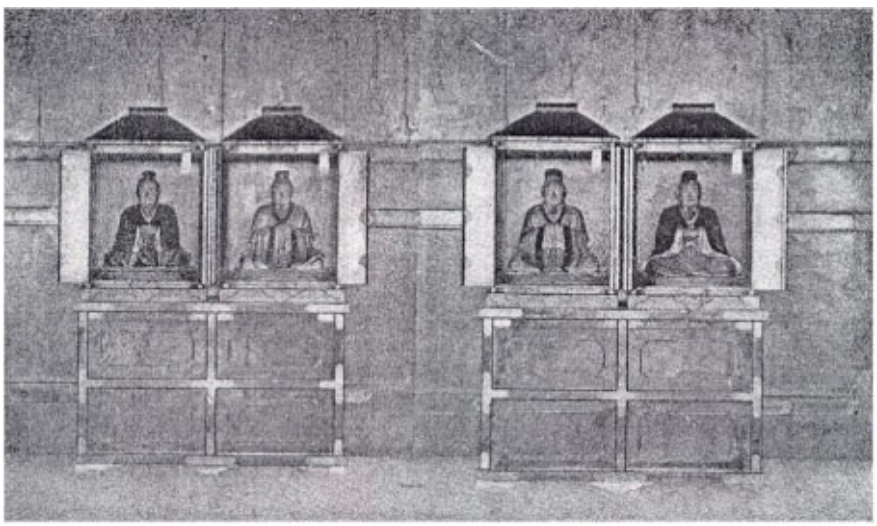
各資料、研究によりこの孔子像が2尺1寸（約64㎝）の木造の坐像、極彩色、玉眼であり、京都七条仏所の第23代康音が制作の任に当たっていたということが分かっている。しかしながら、旧湯島聖堂大成殿内正殿孔子像と顔子・曽子・子思子・孟子の4体の弟子像は既に全て震災によって焼失している為、立体として造形を知る資料は決して充分なものとは言えない。そのような中で具体的な像容を知る手掛りとして復元制作の重要な一端を担った資料について触れておく。



挿図１　《先聖殿安置孔子像絵葉書》斯文会所蔵

1　旧湯島聖堂孔子像および四配像（顔子・曽子・子思子・孟子）の写真、斯文会蔵

昭和6年、聖堂創建300年を記念して斯文会より発行された絵葉書中の、厨子に安置された孔子像（挿図1）と四配像（挿図2）の写真である。像自体の写りは小さく、それぞれの細部を読み取るまでには至らないが、その像



挿図２《先聖殿四配像》斯文会所蔵

高の差異、輪郭や比例均衡、手の組み方、袖のあり方など想定復元の際にそれぞれの像における特徴となる部位を確認することができる。また、『昌平志　巻第一　廟図誌』と合わせることにより諸像の配置を知ることができ、これを基にすると、挿図2において右端より、子思子、顔子、曾子、孟子ということになる。

2　孔子像の模刻像

挿図3《先聖殿孔子模刻像》
新海竹太郎作　史跡　足利学校所蔵

旧湯島聖堂孔子像は先に述べたとおり関東大震災時に焼失してしまったが、震災以前に模刻された彫像が存在することが明らかになっており、その一つとして近代日本を代表する彫刻家、新海竹太郎による旧湯島聖堂孔子模像（挿図3）がある。この像は足利学校に所蔵されており、現地にて実見することができた。像の台座背面部には「明治43年11月為朝報社之囑　新海竹太郎謹模」と彫り記され、この孔子像が震災以前の明治43年に、新海竹太郎により旧湯島聖堂孔子像を模して作られたものであることを示している。また、斯文会蔵の写真（挿図1）と比較しても、輪郭、手の組み方、衣の流れなど酷似した点が多数見られ、足利学校の旧湯島聖堂孔子模像は焼失した旧湯島聖堂の孔子像とほぼ同一の像容であると推測される。立体として残る貴重な資料であり、本復元に際しては基本資料とした。新海による孔子模像は像高22.5㎝であり、旧湯島聖堂孔子像に比べ小像であるが、実見したところその像容は堂々としたものであり、穏やかな中にも威厳を持ち、実寸以上の大きさを感じさせるものであった。塑造、木彫といった制作方法の違いはあれども、その厳格な雰囲気は旧湯島聖堂の孔子像と相似たものであったろうと想像させる。

3　四配像（内3体）の古写真、東京国立博物館蔵

前述したように、孔子像の復元には新海竹太郎作の模刻像を基本資料としたわけだが、四配像についてはそのような模刻像の存在は確認できておらず、東京国立博物館蔵の古写真を基本資料とした。幸いなことにガラス

挿図4《湯島聖堂大聖殿内木像》
『東京国立博物館所蔵幕末明治期写真資料目録Ⅰ―図版編―』
図版番号3081310、右 顔子　中央 曾子　左 孟子

挿図5　心棒制作

挿図6　粘土荒付け

挿図7　粘土付け

挿図8　粘土仕上げ

乾板から起こした3体の写真は鮮明なもので、細部まで確認出来得るものであった。斯文会蔵の写真（挿図2）とそのなかに写る像の配置から、これら3体の像容を比較し、それぞれが顔子（挿図4 右）、曽子（挿図4 中央）、孟子（挿図4左）であると設定することとなった。残る一体について挿図1・2で確認してみると、その衣服の表現は孔子像のそれと非常に近い形であることが分かる。このことは子思子が孔子の孫にあたり血縁関係があることと、なんらかの関係があるのではないだろうか。また、信州高遠藩々校進徳館蔵の四配像の像容と旧湯島聖堂の四配像のそれら比較してみると、冠、袖の流れ、手の組み方、台座の処理等に類似性が見られ、古写真の人物決定における整合性をうかがうことができる。これら3枚の古写真は、木造であった当時の像の様相を直接伝える唯一の資料であり、表情や装束の表現など、それぞれの像の性格を感じさせる重要な資料となった。

湯島聖堂大成殿内の孔子・四配像を復元するにあたり、諸資料を参考にし、特に新海竹太郎による模刻像と東京国立博物館像の四配像写真を基準作例としながら、他領域での考察も念頭に置き像の想定復元を試みることとした。新海の模刻像と四配像の写真の相貌には共通して、仏像の温顔とはかけ離れ、面的な強さによる厳格な印象を受け取ることができる。孔子像を制作した康音と七条仏所は様式的な造形を用いながら、写実性を加味する独自の造形を試みたのではないだろうか。七条仏所大仏師宮内卿法印康清制作による大徳寺総見院の織田信長像が孔子像に類似した像として考えられるが、信長像の顔も孔子・四配像と同様、面を強く意識して制作され、独自の写実的で緊張感のある造形となっており、七条仏所の特徴が理解される。以上のことを踏まえ、今回の復元では、次のような課程でほぼ原寸大の制作を試みた。

(イ)　　心棒制作（挿図5）

孔子像は像高約64㎝の坐像であり、心棒の高さを60㎝と実寸よりやや小さめに設定し、心棒を組むこととした。斯文会から提供して頂いた写真資料を拡大し、およその輪郭を把握し、中心となる軸を定め、肩、腰、膝の長さを導いた。四配像については主として東京国立博物館の古写真を参考とし、像高を60㎝と設定した。孔子・四配像共に垂木（杉材）、小割（杉材）、棕櫚縄、針金（直径3㎜の銅線）を材料とし心棒を組んだ。

(ロ)　　粘土荒付け（挿図6）

心棒に粘土を大まかにつけていく制作工程である。頭、胴部、腰部、脚部をそれぞれの量の均衡を意識しながら粘土を置いていく。この段階では目鼻や装束の皺などの細部には捉われず、大きな量塊による像の構築や面の向き等を意識させるような制作が重要となる。

(ハ)　　粘土付け（挿図7）

荒付けの後、より形態を明確にさせ、立体としての存在感を強くするために、粘土付けを行った。新海による孔子模像を基本作例とし、あらゆる角度から観賞に耐えうるように配慮し制作を進めた。また、この段階では、装束も意識しながら、内の体躯に着せていくような感覚で制作していった。

(ニ)　　粘土仕上げ(挿図8)

全体の大きな量感は、細部に固執しすぎることで弱くなっていく一面を持っている。このことに留意しながら全体を整え、さらに衣文等の細部を明確にしていき、仕上げを行なった。特に相貌に気を配り、孔子像は四配像に比べ年配であるように皺を刻み、眼窩を窪ませた。四配像については、古写真より読取れる像の要素を、忠実に塑造で復元することを心がけた。また、身体の張りと、衣文の質感が相互に響きあい、一つの彫刻としての存在感が生まれるように制作を進めた。

(ホ)　　石膏直付け(挿図9)

粘土から石膏へと材質を転換させた後も、石膏の持つ素材感を考慮し、石膏直付けを行う。粘土の段階から、より充実した密度ある彫刻表現を目指し、さらに厳しく形態を突き詰めていく。加えて、石膏直付けによる制作は、材を削り落としていくカービングの性格も有しており、木彫の持つ実在の緊張感により近い仕上げが可能となる。

以上のような復元の過程で、頭部における面的な表現、思索に耽る哲学的な表情、腰で結ばれた紐のたなびく様な形にみられる写実性などが孔子像・四配像の特徴であることが理解できた。これらのことから、旧湯島聖堂大成殿孔子像が、康音による独自の造形感覚と、伝統的な七条仏所による仏像や武家肖像の様式とが融合した、江戸前期における最も優れた彫刻の一つとして位置づけられるであろう。

このような想定復元を可能にしたのは、筑波大学という昌平坂学問所から脈々と続く知の環境の中で、学問分野である芸術学と、制作分野である日本画、彫塑とが各々の領域を横断して多角的に湯島聖堂について検証を進め、その成果を適宜活用出来たことにある。今後このような横断研究は筑波大学における特徴的な研究となりえるものであり、また、失われてしまった彫像の復元研究に新たな展開を導くものであろう。これ以後も芸術学、日本画との領域を横断しつつ研究を進め、さらに完全な想定復元を進めていく予定である。

(しばた　よしき:人間総合科学研究科教授)

研究協力
宮坂慎司　筑波大学大学院修士課程芸術研究科彫塑分野1年
佐々木桂　筑波大学大学院修士課程芸術研究科彫塑分野1年
佐久間愛子　筑波大学大学院修士課程芸術研究科彫塑分野2年
中原篤徳　筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科芸術学専攻5年

挿図9　石膏直付けによる制作風景(著者)

挿図10　塑造による四配像制作風景

日本画の復元

藤田志朗

研究内容と目的

《賢儒図像扁額模本》の欠損部を復元することによって、旧湯島聖堂内に配置されていた扁額の状態を再現する。

資料の概略と現状

筑波大学に所蔵されている《賢儒図像扁額模本》は、先賢先儒を描いた紙本墨画の作品である。完成した本画ではなく下絵として描かれており、湯島聖堂内にかけられていた16枚の扁額を模写したものと考えられる。元は左右8枚ずつ、計16枚から成っていたものと見られるが、関東大震災で2枚を紛失したため現存するのは14枚である。

各図には扁額として描かれた枠が存在し、枠外にはその図の内寸と図の番号が記されている。図の大きさはまちまちで、縦90㎝、横200㎝から260㎝程度である。図の中には5人から8人の人物が描かれ、左右に44人ずつ、計88人の人物像が描かれている。各図の人物の上部にはその人物を指すと見られる尊名が書かれている。

復元の方法

下絵の現状に忠実に、想定復元を行う。そのためには技術面の復元と形状の復元が必要である。技術の習熟は、現在残っている14枚を模写することで達成することができると考えられる。形状の復元のためには、欠損した部分の具体的な情報を集める必要がある。復元制作のための二点の方法論について以下に示す。

（１）技術面の復元

模写を用いて自ら技術を習熟することにより、原本の墨の線の再現を試みる。筑波大学に所蔵されている《賢儒図像扁額模本》は扁額の下絵として作られたものであるため、全体的に大まかな素早い運筆で描かれている。墨がかすれている部分や勢いのあるはね等、線の抑揚が豊かであるといえる。それに対し、裾や襦袢には薄墨を使って質感の違いが表現されている。また顔や手は筆を変えて繊細な表現をしているなど、人物を描く際にはいくつかの共通のパターンが存在していることがわかる。

欠損した部分の復元にはそれらのパターンを把握する必要がある。さらに作者の運筆の癖を習熟するためには、実際に原本を模写する方法が適切であると考えられる。運筆や墨の濃淡だけでなく、紙質やドーサ液の引き加減、墨や筆の種類についても同様に、原本に使われているものに最も近いものを検討する。以上のように現存する14枚の全ての模写を通して、下絵の構成や傾向をつかみ今後の復元制作の指針を練ることが目的である。

（２）形状の復元

・画像資料の収集

かつて湯島聖堂にあったとされる扁額や、《賢儒図像扁額模本》に描かれている人物に関する資料を収集したところ、東京国立博物館には狩野常信作の《賢哲図像》が収蔵されていることがわかった。湯島聖堂の扁額も狩野常信が描いたものであり、筑波大学の《賢儒図像扁額模本》は湯島聖堂の扁額を模したものと考えられている。度重なる火災のために当時の湯島聖堂の扁額の情報は残っていないが、同じ作者による《賢哲図像》には何らかの接点があることが予想される。《賢儒図像扁額模本》と《賢哲図像》、二つの関連性を確かめるために東京国立博物館で資料調査を行う。現在では欠損した部分の画像資料が極めて少ないため、二つに共通する点を探し、参考にできるかを検

ヤシャの実から染液を抽出する

討する。

・原紙の復元

現在一般に使用されている紙の中から、《賢儒図像扁額模本》の下絵に使われている紙に最も近いものを選択する。原本の厚さや材質から考慮して、薄美濃紙、中美濃紙が適切である。それら二種類の紙を用意し、染色、ドーサ引きをして比較したところ、薄美濃紙では薄すぎる印象を受けるため中美濃紙を選択した。原本は当時の手漉き和紙と考えられる小さめの紙を継ぎ合わせて、一枚の大きな紙にされている。また火災や年月を経たせいで紙が煤け、変色している。よって紙の色味を合わせるため、人工的に古色をつける必要がある。このように復元に使用する紙も以下の方法で染色、加工し、継ぎ合わせて一枚の紙にする。

まず始めに、太陽光を利用して紙の変色を試みたが、思うような結果を得られず断念した。よって植物染料で紙に色を染め付ける方法を選択した。今回染色に使うのはヤシャというカバノキ科の植物で、この実を干し、煎じて染液を抽出する。

紙に色を染め付ける

・染液の準備と染め付け

使用したもの：ヤシャの実、水、鍋、コンロ、バット、竹の定規

水1リットルに対し、ヤシャの実を30-40gの割合いで必要な分だけ作る。煎じ方は水から煮立てて抽出する。液温は約90度を維持し、20分ほどで抽出され始めるが、今回は一時間ほどかけて抽出させ、出来上がった染液の濃度を水で調整する。また、染液の中に墨や灰を混入させることで、煤けた様子や汚れの再現を試みる。

紙を下から準に静かにバットの中に浸し、染液が全体に均等に染み込むように紙を動かす。全体に染液が行き渡ったら余分な染液をバットの端で軽く流し、竹の定規を使って紙をゆっくりと均等に引き上げる。しわにならないよう何点かを固定して影干しする。美濃紙が乾いたら両面にドーサを引く。染色やドーサ引き等、紙の吸水によってできた表面の凹凸はアイロンをかけて平らに伸ばしておく。

継ぐ紙の色味を合わせる

・紙の計測

まず図面、継いである紙の大きさやその枚数を調べ、欠損した二面の紙の形状を決定する。

・紙を継ぐ

使用したもの　大和糊、空刷毛、水刷毛、バット

大和糊の濃度を水で調節し、切った美濃紙の端に刷毛で3㎜から㎜の幅に糊付けする。糊のついた部分に美濃紙を重ね、空刷毛でたたくように馴染ませる。全体がゆがまないように気を配りながら糊付けしていく。

模写制作

（1）下敷きとなる板を準備する

原本を直接ベニヤ板の上に置いて模写をすると、木材の粉や灰汁によって傷んでしまう可能性があるので、ベニヤ板一面に障子紙を張る。

①糊を溶く

②パネルに糊を引く

③障子紙を張る。

④紙の余った部分を止める。

紙を糊で継ぐ

（2）紙と筆を用意する

模写に使用する紙は原本の特徴（色・厚み・質感等）を考慮した結果、薄美濃紙を使用する。筆は実際の模写制作の中で、原本の表現に適したものを検討するために複数用意した。

（3）墨を選ぶ

原本に使われている墨と類似するものを選択するために、数種類の墨や墨

模写制作の準備

汁の色、性質を比較する。その結果、原本に使われている墨は青墨ではなく茶墨であると考えられる。ただし使用した茶墨では茶色味が強すぎる印象があるため、復元までに検討の余地がある。そして今回模写に使用した墨は中国産の墨汁である。原本の墨は硯で摺った墨なので復元制作までに、より表現に適した墨を用意する。

（4）模写制作

現状模写を行う。技術面の習熟に加え、原本の保護のための複本（原本を模写した作品）の制作も目的のひとつである。そのため剥落や損傷、変色、退色など全てそのままに写す厳密さが要求される。ただし今回は技術の習得が第一の目的であるため、汚れ、虫食い等は写さない。主に写し取るのは、墨で描かれた部分全て、鉛筆のようなもので描かれた部分、紙の継ぎ目である。

・紙にドーサを引く

・上げ写し

用意する物：原本・筆・墨・薄美濃紙・墨汁・筆洗・試し描き用の紙（画用紙・薄美濃紙）・テープ・定規・絵皿

上げ写し

《賢儒図像扁額模本》の模写には上げ写しを用いる。上げ写しとは原本の上に置いた模写用紙を、何回も上げ下げすることによって生ずる残像現象を利用して行う方法である。原本は横2m以上の中に五人以上の人物が描かれているが、上げ写しでの模写制作で、2mもの幅の紙を上げ下げすることは困難である。よって縦約1m、幅約60㎝の薄美濃紙に、一人ずつ人物像を描いていく。薄美濃紙の余分な部分は切り取り、人物像を描き終わった際に一図面として継ぎ合わせる。

②で準備したものの上に薄美濃紙を置きテープで固定した後、巻芯で薄美濃紙を巻き上げる。墨は幾つかの濃さを用意し絵皿に分けておく。

原本には人物を指し示す和紙の小片が右の図には左上に、左の図には右上に糊付けしてある。模写の際には糊付けを省略し、同じ紙面上に表記する。

人物と名前を描き終えた後、描かれた人物を囲んでいる大枠の線を描いていく。その線には定規を使って溝引きの技法を用いて直線を引く。

線の特徴を捉え描く

大枠の線の上や画面の端の方に原本の継ぎ目の部分に鉛筆で印を付け、最後に紙を継ぐ際の手がかりとする。（図版参照）

復元制作のための東京国立博物館資料調査

・調査の目的

平成16年6月25日、東京国立博物館に収蔵されている《賢哲図像》の調査を行う。同行したのは人間総合科学研究科・守屋正彦教授、藤田志朗教授、中原篤徳、中根恭子、伊藤たまき、横島菜穂子、池田真理子、野角孝一。筑波大学に収蔵されている《賢儒図像扁額模本》との関連性が期待されるため、復元制作において人物像の形状決定の参考にするのが目的である。

・《賢哲図像》の状態

絹本に彩色され、東巻、西巻の二組の巻物状になっている。絹本の破れや虫食い等がみられるが、和紙で裏打ちされている。各人物上部の和紙部分にその人物を指す名前が墨書きされている。大きさも大学の下絵に近く、《賢儒図像扁額模本》に描かれた人物89人の人物と配置の順序が一致した。《賢儒図像扁額模本》と直接的な関連はないものの、所々で人物像の表現が類似しているため、復元制作の大きな手がかりになると考えられる。《賢哲図像》の状態は、復元する部分を中心に、備忘のため記録する。

模写作品を継ぎ合わせる

・人物表現

《賢哲図像》と《賢儒図像扁額模本》の人物像を比較してみると、類似点と相違点が幾つかあげられる。まず、《賢哲図像》の人物像は絹本に彩色されているため、表情や服装の個性が豊かであり年令の設定も幅広い。体の線は太く

てしっかりしており，線のかすれや素早い運筆が少ないため完成された印象を受ける。服装のしわの本数も整理されており模様も大変繊細である。これに対し、筑波大学の《賢儒図像扁額模本》は人物像の個性を持ち物で表現しており、表情や服装にあまり変化が見られない。そして服装に模様は描かれておらず、帯や帽子や靴は簡略化されている。下図の運筆には動きと速さが感じられ、墨の濃度を変えることで質感に変化をつけている。

体の表現については《賢哲図像》の人物は筑波大学のものに比べて、足が小さく描かれている。手にはそれほどの違いはないが、《賢儒図像扁額模本》の方が多少小さく細く表現されている。《賢儒図像扁額模本》には全ての人物にひげが描かれているが、《賢哲図像》にはひげのない人物が三体存在する。同じく《賢儒図像扁額模本》の人物はみな共通の体格で表現されているが、《賢哲図像》の人物は肉付きの違いや年令が描き分けられている。ただし特徴のある人物については両方で同一の表現がされている。

動作については、同じ人物同士を比較した場合、類似するものと、一部（顔の向き・左右の手の表情）違うものと、全く一致しないものがあるが、体の方向と足の位置はほぼ全員同じで中央にあったとされる孔子像を向いている。

以上の類似点、相違点を踏まえて《賢哲図像》の資料が復元制作において転用できる可能性を検討する。

復元制作

復元制作ではクラフト紙に鉛筆で大まかな下図を作り、それを別紙に写し取り墨で下図を作る。下図は描き起こすごとに修正を加え、本制作に向けてより忠実な再現を目指す。人物の体の形態は東京国立博物館で記録した《賢哲図像》の資料を参考にし、その他の顔や手足の表現、運筆等は現存する《賢儒図像扁額模本》をもとに設定する。《賢哲図像》の「秦祖」、「顔高」、「壌駟赤」、「石作蜀」、「公夏首」、「公西輿如」、「公西蔵」、「陳亢」、「琴牢」、「歩叔乗」の形態に近いと思われる人物像をそれぞれ14枚の《賢儒図像扁額模本》から選びだし、《賢哲図像》と照らし合わせて下図を作成する。なお人物像の流れに違和感が生じないよう、復元する部分の前後二つの図を確認しながら制作する。出来上がった下図をもとにして作成した原紙に上記の人物像を描く。模写を通して復元制作に適した画材を検討した結果、墨は青墨と茶墨を混ぜたものを使用し、筆は削用と嘯を用いて制作する。なお今回は靴跡や水染み、虫食い等は再現しない。

（ふじた　しろう：人間総合科学研究科教授）

研究協力
池田真理子　筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科芸術学専攻2年
野角孝一　　筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科芸術学専攻2年

制作風景（著者）

元禄４年の湯島聖堂

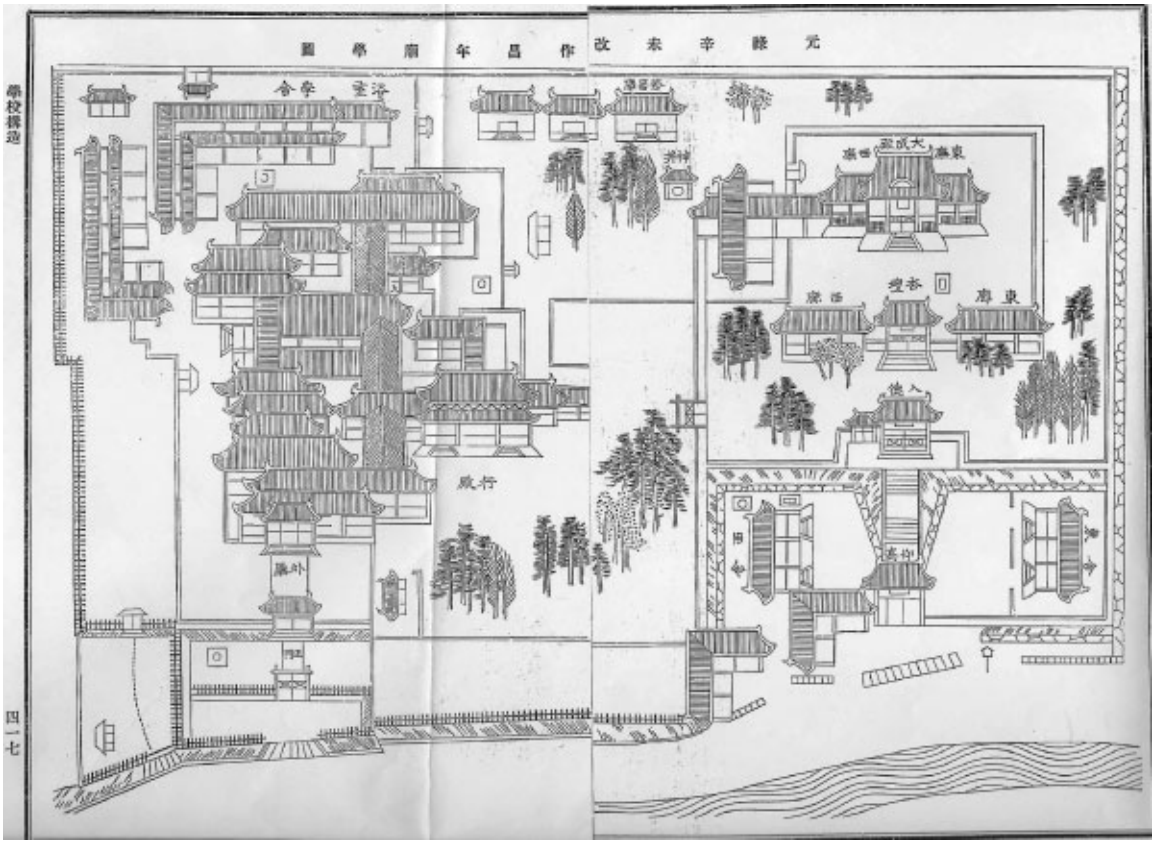


図1「元禄辛未改作昌平廟学図」

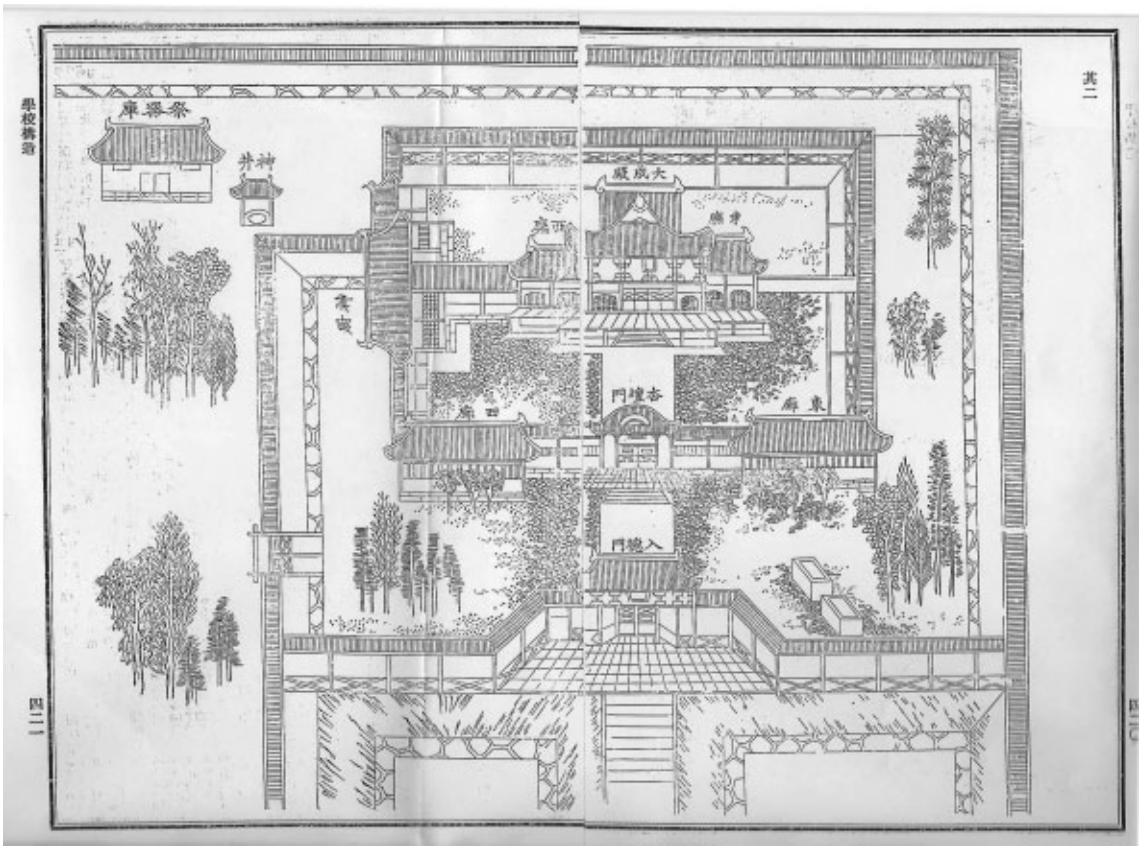


図2　大成殿詳細図面

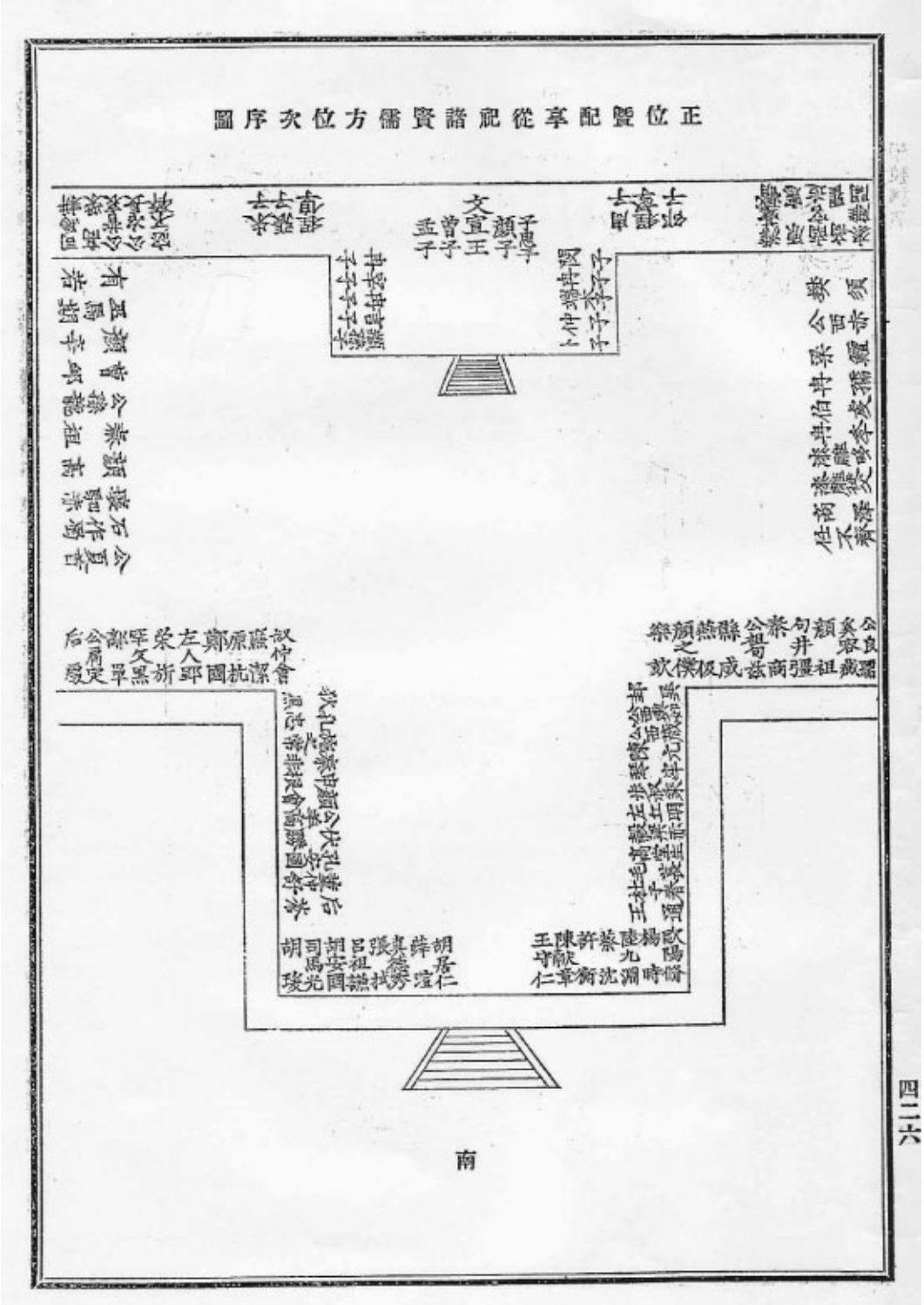


図3　大成殿　内部礼拝空間の詳細

釈奠の儀式に用いられた筑波大学所蔵の狩野山雪筆《歴聖大儒像》はあまりに状態が良く、常設して掛けられていたわけでないことは、その良好な彩色や痛みのない画面から一見して明らかと認められる。おそらくは常設空間としては正面正殿に孔子像ならびに四配（顔子、曽子、孟子、子思）を安置し、そして壁面に扁額16面が設置されたとみなすことができる。立体像である孔子像等五体ならびに扁額は移動にふさわしい重量とは考えがたく、大成殿での儀式がない折にも常設されていたと考えて間違いないであろう。従って釈奠の折、そのような祭典の時期だけ、短期間のみ宋儒6人の肖像画、言い換えるならば《歴聖大儒像》6幅を正面左右に各3幅ずつ掛けたと、先の画像の状態から推論できる。

1－6　狩野山雪筆「歴聖大儒像」

掛幅装　六幅　紙本着色

1.朱子

2.張子

3. 程伯子

筑波大学の前身校の最初は師範学校である。同校は湯島聖堂ならびに昌平坂学問所の遺構を利用したもので、当時、わが国最初の博物館や図書館の最初にあたる書籍館も併置されていた。その後1873年に東京師範学校、1886年（明治19年）に高等師範学校と改称し、1902年（明治35年）に東京高等師範学校と改称し、文京区大塚に移転している。そしてこれに絡んで重要なことは近代になって行われなくなった孔子の祭典である釈奠の復活に嘉納治五郎ら東京高等師範学校の教師が関与し、当時の師範学校のあった大塚において釈奠の儀式が再びはじめられたのであった。そのためか筑

4.周子

5.程叔子

6.邵子

波大学には林羅山が最初に開いた、上野公園にあった忍岡聖堂以来の狩野山雪筆《歴聖大儒像》も伝来し、21幅ある肖像は筑波大学に宋儒六幅、東京国立博物館に他の15幅が所蔵されている。とくに宋儒の6幅は釈奠の際に掛けられるものであった。

《歴聖大儒像》は紙背に「浅草文庫」印が捺され、文庫が湯島聖堂資料を明治期になって保管したところから、そちらより移動したものであることが伺われる。模本14面については文庫印はないが、紙背に「東京高等師範学校」印が捺されている。

7－22 「賢儒図像扁額」模本　16枚（うち復元図版2枚）紙本墨書

本研究の端緒となったのは湯島聖堂から引き継がれた《歴聖大儒像》6幅が筑波大学附属図書館に所蔵され、それと関連する資料として、もとは湯島聖堂の大成殿内を飾った扁額と思われる後世の模本《賢聖障子図》14面がメクリの画稿として伝来したことによる。「賢聖障子図」は古くは平安期にさかのぼる画題で、さらに飛鳥時代へとさかのぼって、儒仏道の信仰が仏教の受容とともにわが国に入っている。この古典的画題を筑波大学の模本に名称として当てることは適切ではなく、実際《賢聖障子図》に描かれた肖像と14面中の歴代儒者の肖像は内容が相違し、附属図書館に所蔵された折に適切な画題がなかったものか、美術史的な分類を顧慮せず、便宜的に「賢聖障子図」の名称をあて、筑波大学の所蔵にきしたものと考える。しかし本来は孔子から朱子に至る歴代の儒者を14面に分けて網羅した賢儒肖像とみなすことができる。

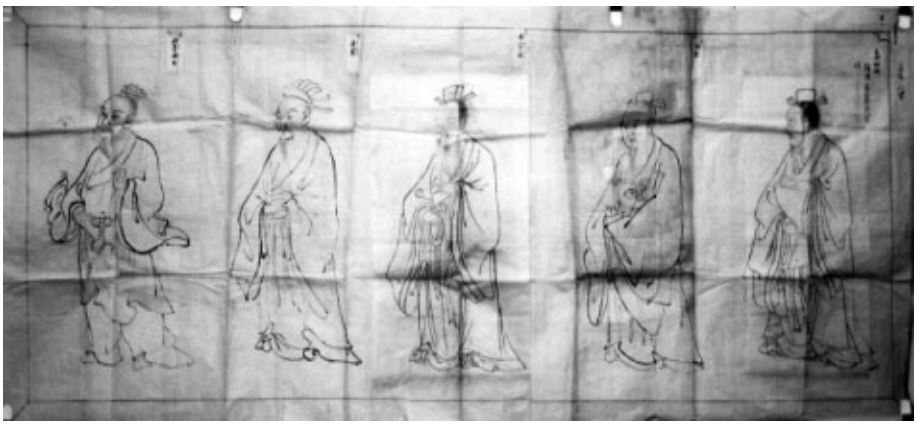
本図は当初は14面ではなく、筑波大学附属図書館の目録には16面あったことが記録され、それが罹災し、2面が失われた経緯がある。紙背には「東京高等師範学校」印が捺され、『昌平志』に記録される扁額16面と員数とも一致するものと想定され、本図が模本として、大成殿内にあった扁額をいつのころか記録とした粉本であることが想定されたのであった。

これを研究仮説とした場合には、《賢聖障子図》と呼称される模本と考えられる画稿14面が、一体何時ごろの扁額の記録化であるのかが問題となろう。『聖堂略志』の図面から判断するに、江戸前期に湯島聖堂が現在地に開かれた折、当初の礼拝空間を荘厳するため、大成殿内に入り、両脇の壁面から、孔子像を祀る正面に至る。その両翼壁面に、左右各八面の扁額が掛けられたことが知られる。扁額は最初、狩野益信が1688（元禄元）年に描いたが、1703（元禄16）年に焼失。翌1704（宝永元）年にこれを補うべく狩野常信が担当したことが記録されている。

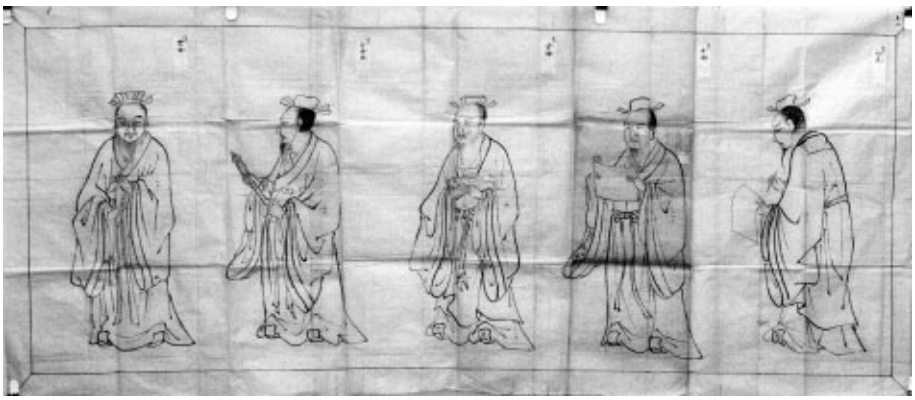
それ以後に扁額が制作された記録はなく、おそらく筑波大学所蔵の14面はこの両者いずれかの写しと考えられるが、模本の描かれたと考えられる時代性は、どう考慮しても幕末あたりまで下るものと想定される。そのため、焼失した益信による当初の扁額を写したというよりは常信の模本とすることが可能性としては濃厚であり、これを仮説として大成殿内部の復元研究を進める糸口を見出したのであった。

《賢儒図像扁額模本》は、元は16枚あったとみられるが、14枚から成り、1枚に5～8人ずつ、計89人の賢儒像を描いている。薄紙を何枚も繋いでいる上、各図には必ず枠が描かれる。その各図の枠上の右上隅には「6尺5寸8分」といった額の大きさを示す紙が添付される。また、「左」図は図の右上隅に、「右」図は図の左上隅にそれぞれ「左ノ一」「右ノ一」といった図の配置順を指示する紙が添付され、各賢儒像の上にもやはり同じように、「左」図は人物の右上に、「右」図は左上にそれぞれ「左一　澹臺滅明」「右一　宓不斉」といった各賢儒像の尊名を示す紙が添付されている。さらに各賢儒像の着衣部分には、読みとれるかとれないかほどのかすかな字体にて色を指示するとみられる文字が書かれている。こうした点からみて、この14枚の図は、《賢儒図像扁額》を描くための模本であったとみられる。落款等はみられず、模写した人物を知る手がかりは、唯一、各図裏に捺された朱文方印「松谷天来粉本之印」と朱文方印「東京高等師範学校図書館印」である。

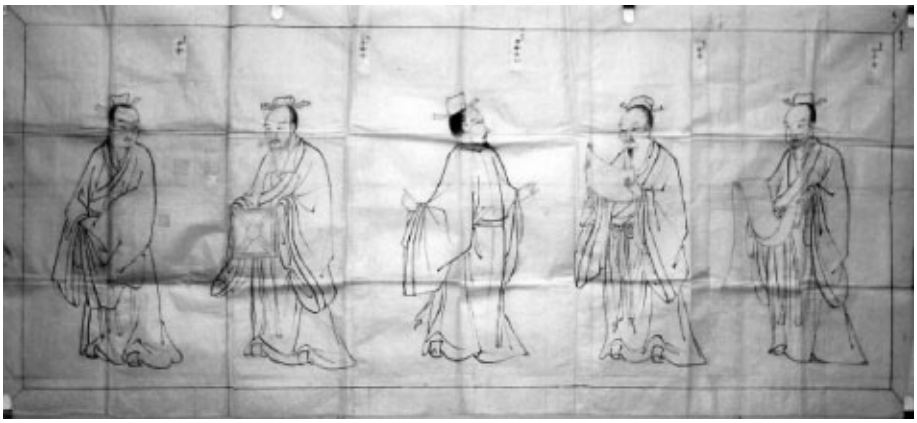
正面左側壁面から入り口に至る扁額8面



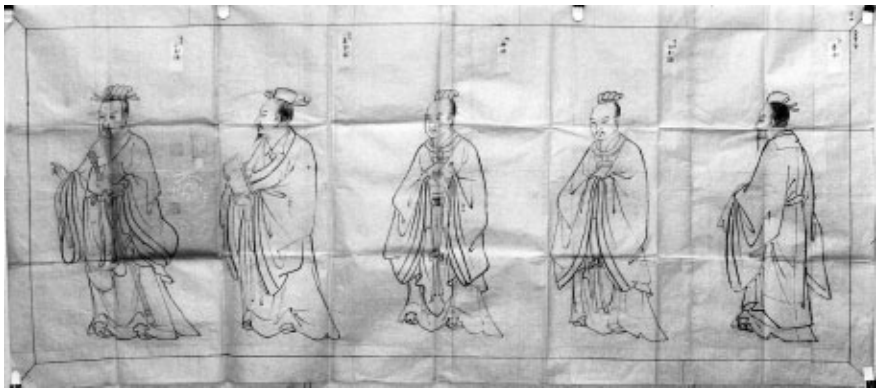
7.「左ノ一」（画面左から）
左一　澹臺滅明（タンタイヘツメイ）、左二　原憲（ゲンケン）、左三　南宮适（ナンキウカツ）
左四　商瞿（シャウク）左五　漆雕開（シツテウカイ）



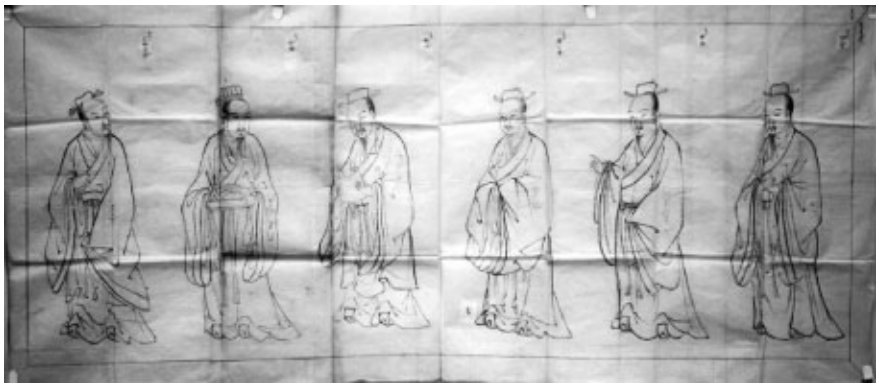
8.「左ノ二」（画面左から）
左六　樊須（ハンシュ）、左七　公西赤（コウセイセキ）左八　梁鱣（リヤウテン）
左九　冉孺（センジュ）、左十　伯虔（ハクケン）



9.「左ノ三」（画面左から）
左十一　冉季（センキ）、左十二　漆雕哆（シツテウシャ）、左十三　漆雕徒父（シツテウトホ）、
左十四　商澤（ショウタク）、左十五　任不斉（ジンフサイ）



10.「左ノ四」（画面左から）
左十六　公良孺（コウリャウジュ）、左十七　奚容蔵（ケイヨウテン）、左十八　顔祖（ガンソ）
左十九　句井彊（コウセイキャウ）、左廿　秦商（シンセウ）



11.「左ノ五」（画面左から）
左廿一　公祖句茲（コウソウコウジ）、左廿二　縣成（ケンセイ）、左廿三　燕伋（エンキウ）
左廿四　顔之僕（ガンシボク）、左廿五　樂欬（ガクカイ）、左廿六　邽巽（キソン）

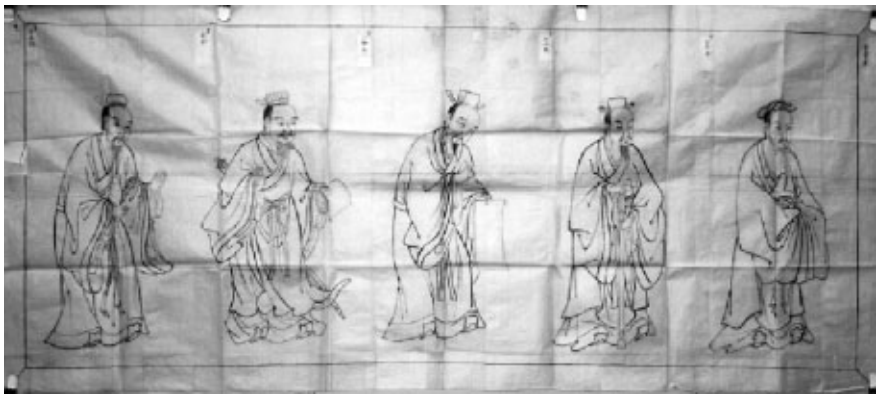
12.「左ノ六」（復元図版）

（左から）
左二十七　公西輿如（コウセイヨジョ）
左二十八　公西蔵（コウセイテン）
左二十九　陳亢（チンコウ）
左三十　　琴牢（キンロウ）
左三十一　歩叔乗（フジョジャウ）

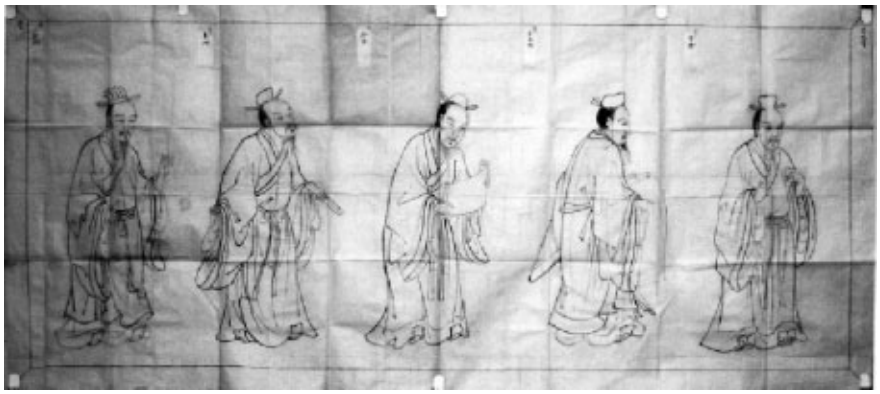
13.「左ノ七」（画面左から）
先儒左一　左丘明（サキュウメイ）、先儒左二　穀梁赤（コウリャウセキ）、先儒左三　高堂生（コウトウセイ）、先儒左四　毛萇（モウチヤウ）、先儒左五　杜子春（トシシュン）、先儒左六　王通（オウトウ）

14.「左ノ八」（画面左から）
先儒左七　歐陽脩（オウヤウシュ）、先儒左八　楊時（ヤウジ）、先儒左九　陸九淵（リクキウエン）、先儒左十　蔡沈（サイチン）、先儒左十一　許衡（キョコウ）、先儒左十二　陳獻章（チンケンシャウ）、先儒左十三　王守仁（オウシュジン）

正面右側から入り口に至る扁額8面



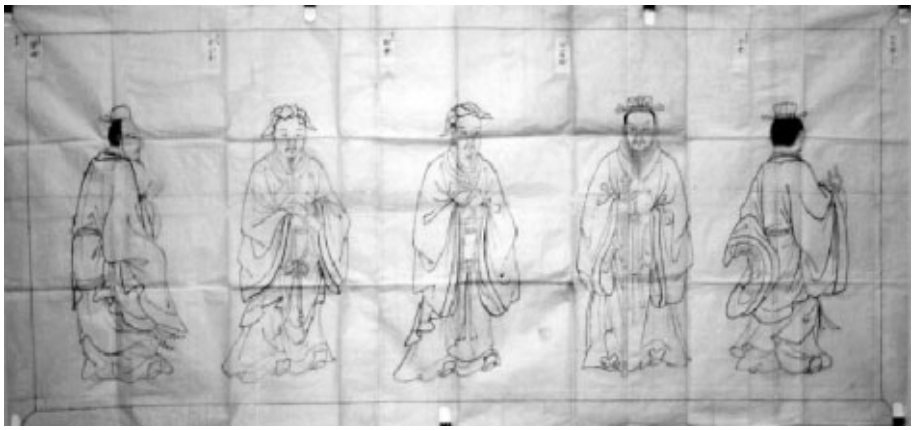
15.「右ノ一」(画面右から)
右一　宓不斉（フツフサイ）、右二　公冶長（コウヤチャウ）、右三　公晳哀（コウセキスイ）
右四　高柴（コウサイ）、右五　司馬耕（シバコウ）



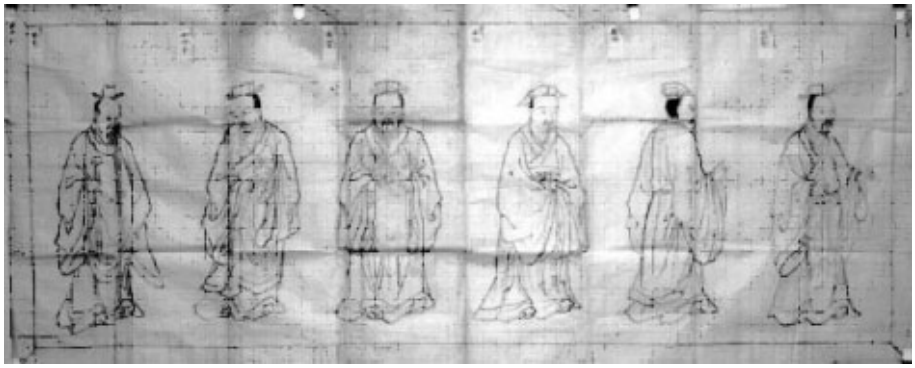
16.「右ノ二」(画面右から)
右六　有若(ユウジャク)、右七　巫馬期（フバキ）、右八　顔辛（ガンシン）
右九　曹卹(ソウトク)、 右十　公孫龍（コウソンリャウ）

17.「右ノ三」(復元図版)

（右から）
右十一　秦祖（シンソ）
右十二　顔高（ガンコウ）
右十三　壤駟赤（ジャウシセキ）
右十四　石作蜀（セキサクショク）
右十五　公夏首（コウカシュ）



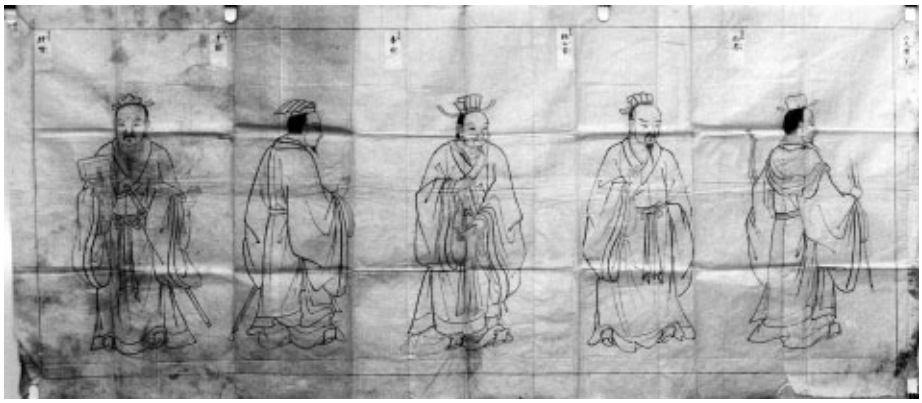
18.「右ノ四」(画面右から)
右十六　后虔（コウケン）、右十七　公肩定（コウケンテイ）、右十八　鄔單（チヤウタン）
右十九　罕父黒（カンホコク）、右廿　榮旂（エイキ）



19.「右ノ五」(画面右から)
右廿一　左人郢（サジンテイ）、右廿二　鄭國（テイコク）、右廿三　原亢（ゲンコウ）
右廿四　廉絜（レンセツ）、右廿五　叔仲會（シュクチウクワイ）、右廿六　狄黒（テキコク）

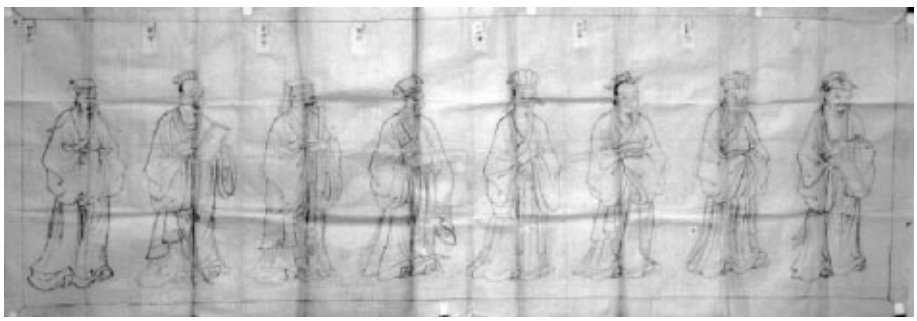
《賢儒図像扁額》について（賢聖障子の名称由来）

『昌平志』に「賢儒図像共八扁或五六位或七八位共為一扁掲於両廡次序起北転至於南」、「賢儒像」、「賢儒像扁」、「賢儒圖（図）像」と述べられ、また『聖堂略志』に「七十二賢及び先儒の畫（画）像扁額」「先賢先儒の畫（画）像」とある。一方『東京高等師範学校図書館和漢書書名目録』及び『東京文理科大学附属図書館和漢書分類目録』には「賢聖障子図」と記され、当初から画題を誤って題したことがうかがわれる。「賢聖障子」は内裏の紫宸殿にある漢唐代の賢人、聖人、功臣32人を東西両庇に描いた障子絵を指し、儒教の賢儒の尊名とは対応していない。



20.「右ノ六」（画面右から）
右廿七孔忠（コウチウ）、右廿八　施之常（シシジャウ）、右廿九　秦非（タイヒ）
右三十　申棖（シンタウ）、右三十一　顔會（ガンクワイ）

21.「右ノ七」（画面右から」
先儒右一　公羊高（クヤウコウ）、先儒右二　伏勝（フクサウ）、先儒右三　孔安國（コウアンコク）
先儒右四　董仲舒（タウチウジョ）、先儒右五、后蒼（コウサウ）、先儒右六　韓愈（カンユ）



22.「右ノ八」（画面右から）
先儒右七　胡瑗（コクワン）、先儒右八　司馬光（シバコウ）、先儒右九　胡安國（コアンコク）、先儒右十　呂祖謙（リョソケン）、先儒右十一　張栻（チャウシキ）、先儒右十二　真德秀（シントクシウ）、先儒右十三　薛瑄（セツセン）、先儒右十四　胡居仁（コキョジン）

昌平坂学問所の文書史料

山澤　学

1　昌平坂学問所

本学附属図書館には、湯島聖堂に関連する昌平坂学問所関係文書が所蔵されている。

昌平坂学問所（正式には学問所）は、1797(寛政9)年江戸幕府によって創設された官立の教育機関である。その前身は、湯島聖堂を預かる林大学頭家の家塾であり、昌平黌と通称された。18世紀に入ると、林家は衰退期を迎えた。明和・安永（1764-81）ころには「聖堂は第一無用の長物」との声まであったのである。

しかし、林家と聖堂が再び社会の前面に躍り出る時代が現れる。寛政改革を断行する老中松平定信は幕府教学の再興を志し、幕臣およびその子弟の教育の場として聖堂を復興し、試験制度も整備した。寛政2年には大学頭林信敬らに対し、朱子学を正学とし、その他の異学を禁止することが申し渡される（寛政異学の禁）。同5年、信敬が没すると、美濃岩村藩主松平乗薀の男子乗衡に跡を継がせる。彼こそが林述斎であり、寛政9年には彼を総裁とする学問所を幕府直轄と定めるに至った。昌平坂学問所の誕生である。

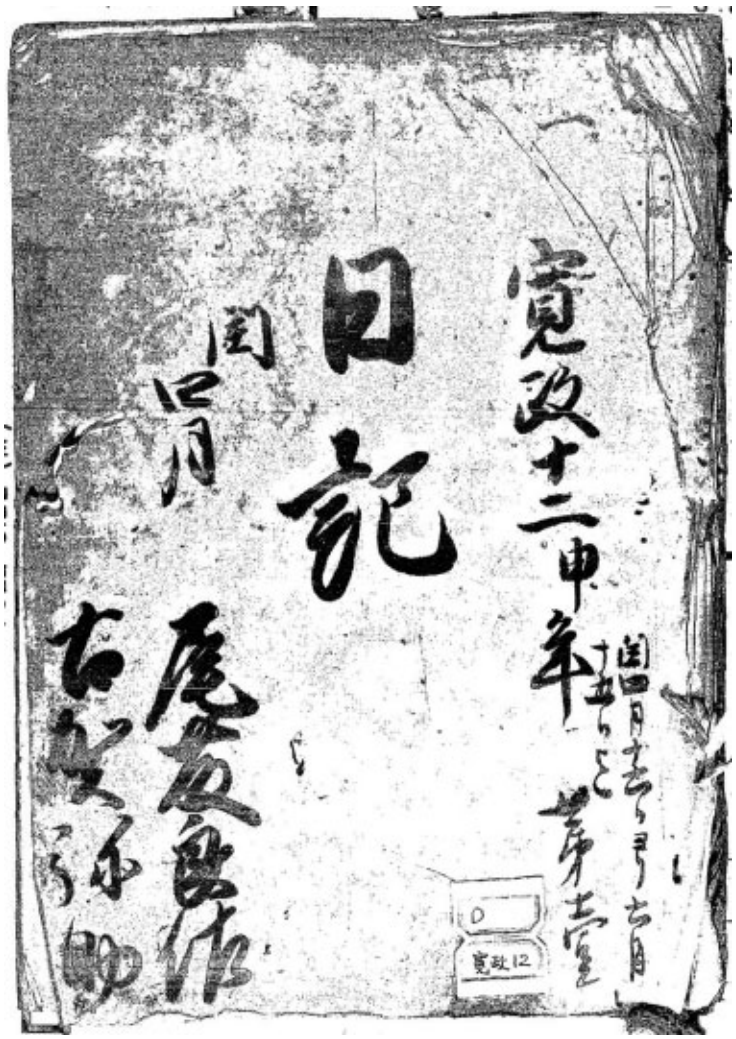


図1 「昌平坂学問所日記」第1冊　1800（寛政12）年

図2 「昌平坂学問所日記」第2冊　1800(寛政)12、6月18－24日

図3－1　年欠　8月晦日佐藤一斎書状(左:本紙、右:端裏書)

図3－2　年欠8月晦日
佐藤一斎書状の封紙

学問所では、林大学頭を筆頭とする儒者が教育にあたった。儒者は幕府若年寄支配で、幕府の文教行政をも担った。学んだ者には、幕臣とその子弟で正式に入学した稽古人、諸藩から学問所内の書生寮に寄宿することを許された書生、入学はせず講釈を聴講した聴聞人などがいた。昌平坂学問所は、まさに全国武家にとっての教育の殿堂となった。

2　筑波大学附属図書館所蔵昌平坂学問所関係文書

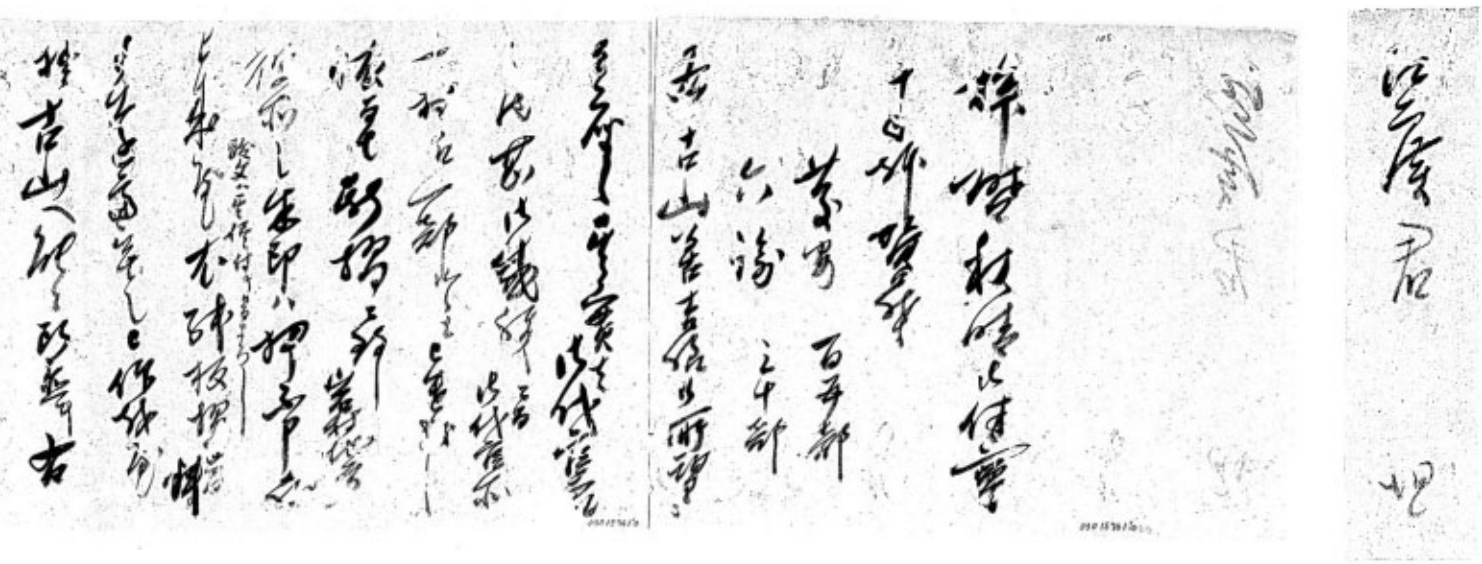
昌平坂学問所は、1870(明治3)年新政府により当分休校とされ、間もなく廃止された。それから80年ほど経った昭和20年代初頭、学問所で記された公用の日記や文書のうち木箱一箱分が幸運にも東京神田の古書肆一誠堂を介して本学の前身校に所蔵されることになった。この文書群こそが昌平坂学問所関係文書である。東京教育大学廃学時、教育学部教育学研究室から本学へ移管され、当図書館の貴重書に指定されることになった(高木三男「本学の未整理資料群」『つくばね』12(4)、1987年)。

本学の前身校東京高等師範学校が昌平坂学問所の跡地に建設されたことを想うと、まさに機縁である。その点数は、当図書館WEB-OPAC上では308点を数える。寛政年間(1789-1801)から明治3年まで、学問所創立期から当分休校までのものである。

内容は、寛政12年から1862(文久2)年儒者が輪番で記した日記47冊(一部欠)、1849(嘉永2)年から1868(慶応4)年の押切帳(学問所所蔵図書の貸出簿)、学問所の教育課程・運営にかかわる諸記録、そして書状と多岐にわたる。詳細は、橋本昭彦「昌平坂学問所関係文書(筑波大学所蔵)の全体構成」(『国立教育研究所研究集録』16、1988年)、同編『昌平坂学問所日記』全三冊(斯文会、1998年～刊行中)、同『江戸幕府試験制度史の研究』(風間書房、1993年)を参照されたい。

3　書状が語る学問所の実像―『慶安御触書』の新知見―

昌平坂学問所関係文書は、平成15・16両年度日本学術振興会科学研究費補助金の助成をうけ、「日本中・近世古文書集成」の一部として広く公開されることになった(http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/pub/kaken/kaken16-mail.htmlを参照)。これまでほとんど未紹介であった書状も183点の整理を終え、



今年度、本図書館貴重書に選定された。

書状のうち29点は総裁林述斎の、111点が佐藤一斎の私信である。一斎は、もと岩村藩士で、述斎の学友でもあった。一斎は述斎の林家継承に際して学問所塾頭に就任、後に儒者となった。一斎の書状は弟子丹羽瀬格庵（清左衛門）宛てのものが圧倒的に多い。

その一通（写真）は、幕領代官古山善吉政礼が領内の村々に一部ずつ配布したいと所望しているので、「慶安」（『慶安御触書』）105部と「六論」（室鳩巣『六論衍義大意』）30部を送付してほしい、という一斎から格庵への依頼状である。格庵は、岩村藩家老で、体制的に弛緩した村社会・百姓の立て直しを図る藩政改革の担い手であった。1830（文政13）年には『慶安御触書』『六論衍義大意』の摺物（岩村藩版と呼ばれる）を出版し、領内村々に配布した。その立役者が林述斎であった。現在、『慶安御触書』は1649（慶安2）年の幕府法ではないとする説が有力で、述斎が元禄時代の甲府藩法を慶安二年の幕府法に仮託し、東日本を中心に普及させたと言われている（山本英二『慶安の触書は出されたか』山川出版社、2002年）。

したがって、この書状は、岩村藩版が成立した文政13年以降のものである。一斎は、格庵に対し、「慶安」の摺り方や役所印を押さないことなど、微細に指示した。追書では、摺手間（印刷費用）を照会しており、印刷経費は代官古山が負担したこともうかがえる。

この書状によれば、代官の古山は、祭酒公、つまり林述斎から岩村藩版の現物を贈られ、その存在を知った。一斎は、こうして「慶安大朝之御趣意」が普及していくことを喜んでいる。この一通によって、昌平坂学問所の中核を占める林述斎と佐藤一斎が『慶安御触書』を幕臣を介し地域へ普及させた過程を明示することができる。19世紀における『慶安御触書』の普及には、学問所儒者の人脈が積極的に関与していた可能性も考えられよう。昌平坂学問所関係文書は、学問所の果たした役割のみならず、江戸時代日本社会の実像を知るうえで他に類のない貴重な史料である。

（やまざわ　まなぶ：人文社会科学研究科講師）

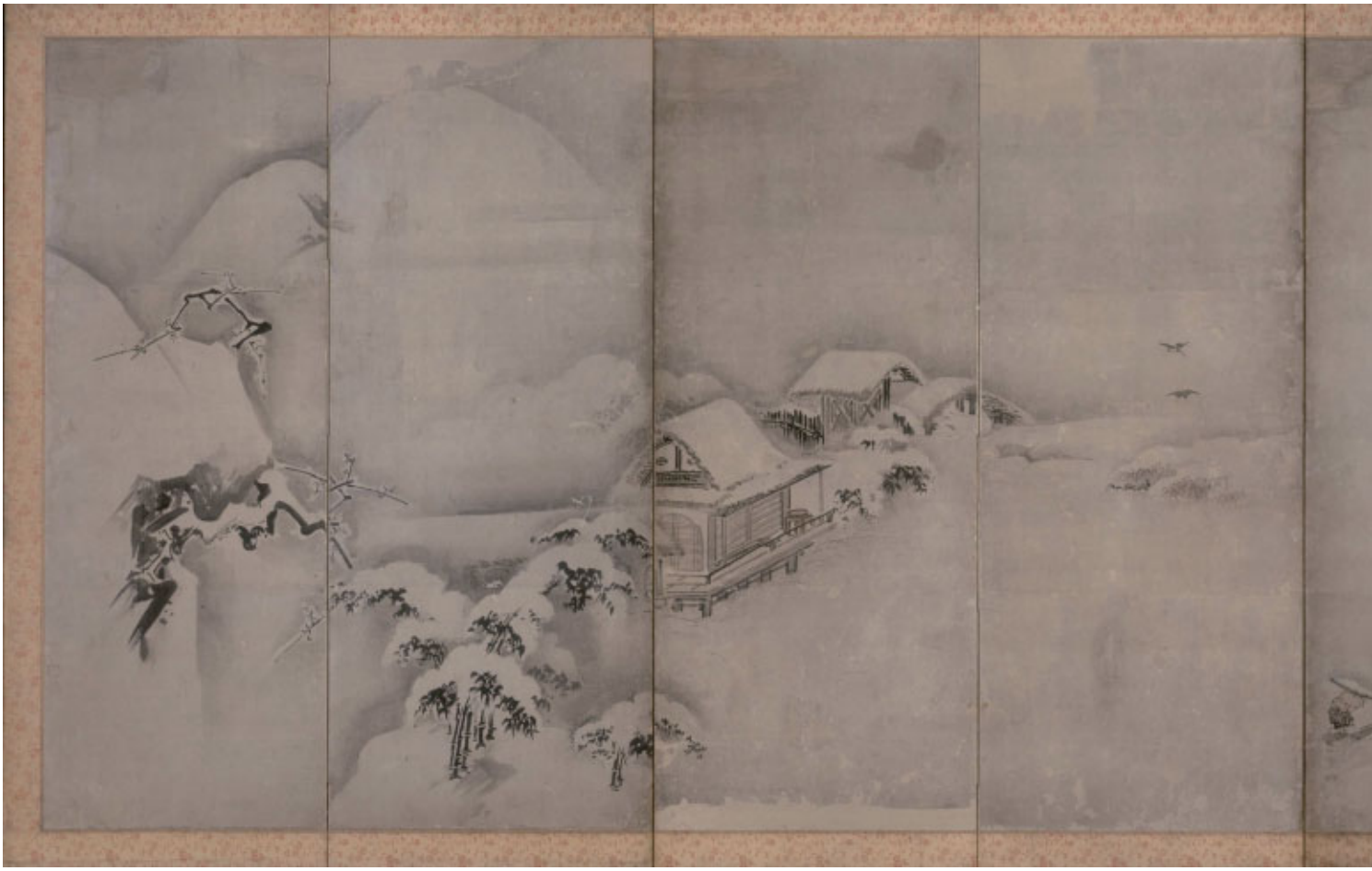
参考図版

23,24　狩野探幽筆
「野外奏楽、猿曳図」屏風 六曲一双　紙本着色

右隻の前景に松樹が生え、奥の家屋の庭先には高士らしき人物が琴を弾じている。右に幼子を抱く婦人が微笑み、子は身を乗り出して琴の音に手を差し伸べている。2扇目から4扇目にかけて、笛、太鼓、鉦などを囃して舞い踊る人物を、2人ずつ3組、対角線上に配す。遠景にうっすらと山並みが見える。左隻には、橋を渡る童子の指し示す方向に、猿曳がいる。手前に1人が腰を下ろし、樹下に4人が楽しそうに見物する。左端の家屋から出てきたらしい男も、2本の樹の間に覗く。人々の視線や指先は、猿曳に集中している。近景でまとめた草体風の画面であり、様々な対角線を描く安定した画面構成には緻密な計算と配慮が伺える。

構図や作風の近いものとして、やや時代は早いが、静岡県立美術館蔵の「七賢九老図屏風」(六曲一双)が挙げられる。探幽は、狩野孝信の長男に生まれ、祖父永徳に代表される桃山時代障壁画の様式を脱し、新たな江戸様式を生み出した。その作風は、一般に淡白瀟酒と表現される。幕府の御用絵師たる地位と強大な組織力により、江戸時代の狩野派の礎を打ちたてたことでも名高い。

左隻左端、右隻右端に、それぞれ「探幽斎筆」の署名と、「法眼探幽」の朱文円印がある。当屏風の画面は、大胆な省略法、対角線を軸にした構成、左右で相称する余白や、柔らかい筆致によって、探幽らしい画趣に溢れている。



25,26　狩野尚信筆
「李白観瀑、剡溪訪戴図」屏風 六曲一双　紙本着色

右隻の「李白観瀑図」は、2扇目に瀑布と童子が、3扇目に李白と川、そして流れ落ちる滝が配され、本屏風の主題である李白観瀑が描かれる。5から6扇目には大きな空間を伴って山の端に顔を覗かせる太陽が描写される。

李白は唐代の詩人で、字を太白と言う。諸方に旅することが多く、慮山を訪れた際に瀑布の雄大さを詠んだ事が李白観瀑の故事として広く知られる。水墨画の画題としても李白観瀑は古来多く取り上げられてきた。

観瀑図は、江戸時代以前においては多くの場合掛軸という縦型の構図で描かれることが多く、屏風絵に描かれた先例として元信の作例などが挙げられる。本図はそれまでの観瀑図の図様を個々のモチーフとしては踏襲しながらも、全体としては屏風絵という横型の構図を形作るため大胆なモチーフの再構成がおこなわれている。

左隻の「剡溪訪戴図」は、1扇目に月が描かれ、2扇目には戴安道を訪ねる子猷が配される。4扇目から5扇目にかけては戴安道の家が描写されている。「東洋画題総覧」によれば、剡溪訪戴とは、子猷がある夜月を眺めつつ酒を飲み、ふと剡溪に戴安道がいるのを思い出し即刻船を出して戴安道の家の門前まで行ったが、結局門を叩かずして帰ったという故事を指す。狩野元信が霊雲院衣鉢乃間に描いた雪中山水図中に剡溪訪戴を描いた部分があるが、幾つかの点において尚信の作品とモチーフに類似が見られ、尚信が粉本とし、本図において転用した可能性が考えられる。

図書館資料の公開とその活用―電子図書館と学術機関リポジトリ―

篠塚　富士男

1　はじめに

附属図書館では、平成7年以来、毎年特別展を開催している。

これ以前にも、図書館で単発的に貴重資料の展示を行なったことはあったが、現在のような形での特別展のスタートとなったのは、平成7年6月に中央図書館新館増築を記念して開催した特別展「天正少年使節と『原マルチノの演説』」であった。この特別展の開催に際し、当時の北原保雄附属図書館長（前筑波大学長）は、「御挨拶」の中で「当館では、貴重書展示室が設けられたのを機に、今後とも図書館資料を広く公開してゆきたいと考えております。」(http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/tokubetuten/aisatu/aisatu.html)と述べている。

この「図書館資料を広く公開する」という北原館長の言葉は、その後の特別展の開催及び貴重書展示室における常設展示（特別展開催時以外は「日本の出版文化」をテーマとする常設展示が行なわれている）によって、継続的かつ着実に実現されているといえよう。普段は貴重書庫に収蔵されているような貴重な資料の現物を、直接見ることができる機会を設けることは、まさに図書館資料を広く一般に公開する場として重要である。

一方、図書館にとっても特別展をはじめとする資料の展示は、総体としての図書館資料群の中から個々の資料をピックアップして紹介する機会にもなり、展示準備の過程での研究者の調査・研究が、大きな成果を生み出す契機ともなっている。

たとえば、今回の特別展と非常に密接な関係にある平成12年の特別展「筑波大学附属図書館所蔵　日本美術の名品～石山寺一切経、狩野探幽・尚信の新出屏風絵と歴聖大儒像～」では、狩野探幽・尚信・田村直翁の新出屏風絵の「発掘」というきわめて大きな発見があったし、平成13年の特別展「日本古代の学問と萬葉集」では前年の特別展にも出展された狩野尚信の屏風と歴聖大儒像が参考出展されたが、この時の図録に掲載された解説は前年の図録の解説とは異なった観点から記述されており、同一の資料の展示であっても研究分野の相違によって新たな研究成果が得られるという好例となった。

2　図書館の基本機能

図書館の基本機能は「知識・情報を収集、整理、保管して利用に供する」ことであり、この基本機能を着実に発展させることによって、本学図書館は「学習・教育・研究の中核的な機構として、学内外に先進的大学図書館像を提示し続ける存在であること」を目標としている（植松貞夫「附属図書館の目標と課題」、『筑波大学附属図書館報　つくばね』30巻1号所収、2004.12, http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/pub/tsukubane/30_1/1.html）。

図書館が資料の「収集・整理・保管」を着実に行い、研究者に資料を提供して、様々な観点から活用してもらうことは非常に重要である。今回の特別展においては、湯島聖堂の「賢儒像」16面の扁額の写しのうち、図書館で所蔵している14面を調査・研究することによって失われた2面を復元する、という、まさに画期的な成果が公開されているが、これも師範学校以来の歴史を持つ本学の前身校から受け継ぎ、多くの関係者の手を経て保管されてきた図書館の収集資料と、こうした資料に着目して独創的な研究を進められた研究者との出会いによって、成し遂げられたものである。

また、この成果は前述のように平成12年の特別展と密接な関係があり、特別展という公開の場が結果的に新たな発見や成果につながったものであるとも考えることができるが、ここには、資料の公開の企画（特別展）→その資料の調査・研究→新たな発見・成果→次の研究・特別展へ、という流れがあるとみることができる。

一般に、資料の適切な公開は有効な活用につながる、と考えられるが、その典型例としては、このようなサイクルを想定することができよう。さらに、特別展のような企画によって幅広い分野の研究者との連携をはかることは、資料を活用した研究のサイクルの上で図書館が異分野の研究者同士にも新たな場を提供することとなり、これも図書館の果たすべき重要な役割であると考えられる。

3　電子展示と電子図書館

図書館ではこのような特別展の開催に際し、図録を作成するとともに、図書館のホームページで電子展示を公開している。これは前述の平成7年の特別展のコンセプトとして「展示そのものと印刷体の展示目録、それに電子展示の公開の三つが一体となって、特別展全体を構成するスタイル」をとり、「電子展示そのものが特別展を構成する柱の一つとなっているので、特別展の展示内容全体をこれによって再現するというのではなく、電子展示ならではの機能を生かして、通常の展示では提供できない新たな情報を付加して公開する」（篠塚富士男「電子展示について」、『天正少年使節と『原マルチノの演説』：ベッソン・コレクション』所収、1995, p.43）ことを目指した方向性が、基本的にその後も踏襲されているためである。

このようなデジタル情報に関する考え方は、平成10年に電子図書館システムを導入した際にも基本的な方向性の一つとして受け継がれた。たとえば、電子図書館で提供している高精細画像を利用すれば、実物よりもはるかに拡大された鮮明な画像を見ることができるが、これも電子化することによって新たな情報（価値）が付加されている例である。

この高精細画像の提供も本学収集資料の公開の方法の一つであり、所蔵資料を電子化しそれをデータベース化して提供する、いわゆるデジタルアーカイブの考え方によるものであるが、平成12年の特別展の図録に、歴聖大儒像のうちの朱子の高精細画像が新出屏風絵の発掘につながった、というエピソードが紹介されており（小西和信「電子図書館と高精細画像」、『日本美術の名品：石山寺一切経、狩野探幽・尚信の新出屏風絵と歴聖大儒像』所収、2000, p.34-37）、適切な方法での資料の公開がきわめて有効に活用される可能性のあることが、ここでも示されている。

4　学術機関リポジトリ

電子図書館では、その当初から、高精細画像等による本学収集資料の公開とともに、本学研究成果を広く学内外に発信して学術研究の振興に貢献することを目的としており、学位論文、科学研究費補助金研究成果報告書、紀要類等を電子化して提供してきた。こうした研究成果の一つとして、たとえば過去の特別展の図録も電子化して公開しておりその成果をたどることもできるが、本学が電子図書館システムを導入した当時の日本では、このような形で系統的に研究成果を発信している機関は、まだほとんどなかった。

しかし、わが国の大学図書館でも、この2-3年の間に「大学で生産された電子的な知的生産物を保存し発信するためのインターネット上の保存書庫」である

「学術機関リポジトリ」の構築に関する議論が急速に進んでいる。学術機関リポジトリとは、学術誌掲載論文等の研究成果を大学として永続的に保存して広く公開しようとするものであるが、本学の電子図書館はこうした動きの先駆けという側面も持っていた。しかし、本学の電子図書館の取り組みが早かったことが結果的に時代的な制約を受けてしまった面もあり、必ずしも現在の学術機関リポジトリとまったく同じ概念のものであるとはいえなかった。そこで、図書館では、新たなコンセプトのもとで、これまで蓄積してきた電子化された研究成果を学術機関リポジトリとして再構築し、グローバル・ルールにしたがって公開する計画を持っている。

また、収集資料の公開についても、同様に新たな視点から再検討することにより、従来の電子図書館の枠組みを、収集資料の公開としてのデジタルアーカイブ、研究成果の発信としての学術機関リポジトリという形でとらえ直そうと計画している。この新たな電子図書館の枠組みを前述の「資料の公開→調査・研究→発見・成果→次の研究へ」というサイクルに対応させて考えると、「所蔵資料

「歴聖大儒像」より「朱子」
（筑波大学附属図書館蔵）の高精細画像の一部　下は拡大図

のデジタルアーカイブによる公開→それを利用した研究成果の学術機関リポジトリへの登載→学術機関リポジトリに登載された研究成果を利用した新たな研究の開始」というモデルでとらえることができ、ここでも資料の公開と活用の循環を想定することができる。

図書館には、今年度から研究開発室が設置された。従来から、特別展や科学研究費補助金による研究成果（データベース）の公開などの機会に図書館と研究者との連携は行われてきたが、研究開発室の設置を機に学術機関リポジトリの構築に関する具体的な検討も進んでおり、図書館資料そのものや、その資料を利用した研究成果を通じた、図書館と研究者の、あるいは研究者相互のコラボレーションが一層進展し、新たな成果が生まれることを期待したい。

（しのづか　ふじお：附属図書館情報管理課課長補佐）

「南瞻部州萬國掌菓之圖」（筑波大学附属図書館蔵）の高精細画像

本図は江戸時代に刊行された仏教系世界図（仏教的世界観に基づく世界図）で、右側の全体図の中の四角で囲まれた部分（全体図の左上）が左側に拡大表示されている。
拡大図はヨーロッパに相当する部分（エウロパ、イタリヤ等の地名が読み取れる）

湯島聖堂大成殿内部空間の再現

木村浩

筑波大学が所有する「歴聖大儒像」六幅と「賢儒図像扁額模本」14面が示す「賢儒図像扁額」16面が、元禄期の湯島聖堂大成殿にどのように設置されていたのかを、CGにより再現することが本研究である。さらに、孔子像等諸聖像も加え、湯島聖堂大成殿内部空間を再現する試みである。

湯島聖堂は、1690（元禄3）年7月に綱吉の発意により造営された儒学の学問所である。1703年(元禄16)年に最初の消失があり翌年に再建されている。その後2度の江戸の大火、関東大震災、第2次世界大戦時の空襲によって焼失・改修を繰返して現在に至っている。

本プロジェクトで復元するのは、元禄3年の湯島聖堂である。1632(寛永9)年徳川幕府の政治顧問であった林羅山が上野忍が岡（現在の上野公園）に建てた孔子廟「先聖殿」を移築したものである。綱吉は先聖殿を「大成殿」と改称し、またそれに付属する建物を含め「聖堂」と総称した。建物全体は朱塗りにして青緑に彩色したと記録に残されている。しかし、建築に関わる資料は乏しく、「昌平志」に記載された記録と、当時の風景を描いたイメージ図を基に検討を行った。江戸時代の湯島聖堂を描いたイメージは「昌平志（図1）」、「江戸名所図会」、「元禄四年聖堂の図（図2）」などに見ることができる。

『昌平志巻第一』には、湯島聖堂大成殿は、南に面して建てられ、幅5間5尺（約10.5メートル）奥行3文7尺5寸（約11メートル）、高さ4丈2尺3寸（約13メートル）のほぼ正方形の建物で、さらにその左右に幅三間（約5.5メートル）奥行一丈九尺五寸（約6メートル）の張り出しがついており、上から見ると凸の字を逆さにしたような構造をしていた。大成殿内北壁の中央には、神座と呼ばれる小室が設けられていた。この室は高さ五尺八寸　（約1.8メートル）奥行6尺5寸　（約1.9メートル）で、手前には七段の階段と手すりがあつた。そしてこの神座に諸聖像が安置されていたことが記されている。

「昌平志」にある「大成殿図」を見ると、屋根は、入り母屋造りで正面の軒先に唐破風の表現がある（図1）。また、「元禄四年聖堂の図」では、正面の軒には唐破風の表現はない。資料としているそれぞれのイメージ図は、建物を正確に再現しているとはいい難く、今回の復元では、入り母屋造りで正面唐破風付きとして行った。

「昌平志」に記されたサイズに従い、まず柱位置の検討から作業を始めた。「昌平志」の表記してあるサイズを柱の芯と芯として捉えることし、柱の位置を決めた。一般的には等間隔に柱を配置すると思えるが、不規則な間隔となった。柱の径は、中央部の柱は円筒形で直径400mm、両廡の柱は円筒形で直径303mmとした（図3）。大成殿の高さに関する情報は高さ4丈3尺3寸といこと以外に乏しくおおよその設定で復元をした。

また、『昌平志巻第一』には、諸像の位置についての記述とともに、その配置図も挿入されている（図4）。その配置図に従い、ここで検討を行った平面図に、孔子像等諸聖像、「歴聖大儒像」6幅、「賢儒図像扁額」16面をプロットするとぴったりと収まった（図5）。今回設定した柱位置は概ね正確であることが裏付けされた。

今回作成した湯島聖堂の復元は、詳細な情報に乏しく、おおよその外観イメージの作成に留めている。今後は、建築の様式やデザインの検討が必要であり、より詳細な調査が必要である。

（きむら　ひろし：人間総合科学研究科助教授）

3D CG制作
呉宗岳　　筑波大学大学院修士課程人間総合科学研究科1年
日高秀穂　筑波大学大学院修士課程人間総合科学研究科1年

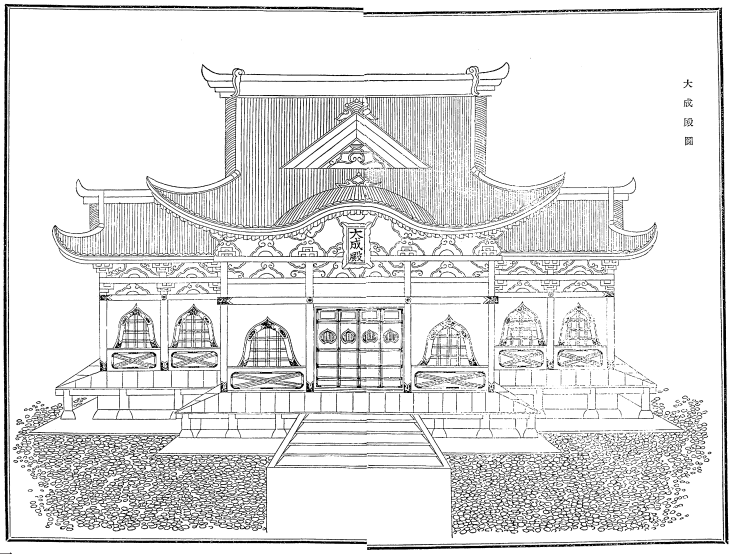

大成殿圖
大成殿

図 1

聖堂之畫圖

図 2

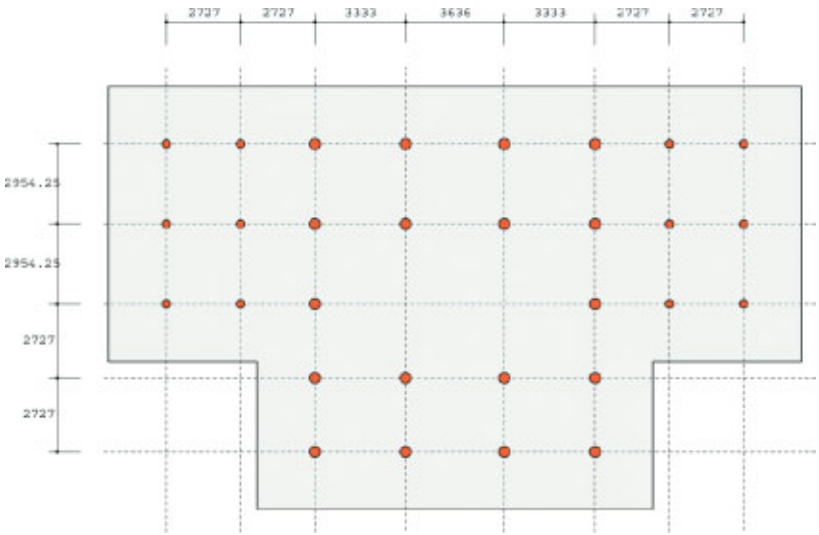

2727
2727
3333
3636
3333
2727
2727
2954.25
2954.25
2727
2727

図 3

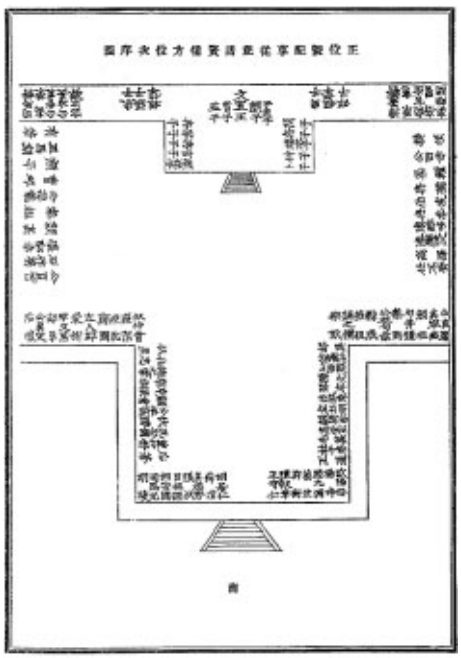


図 4

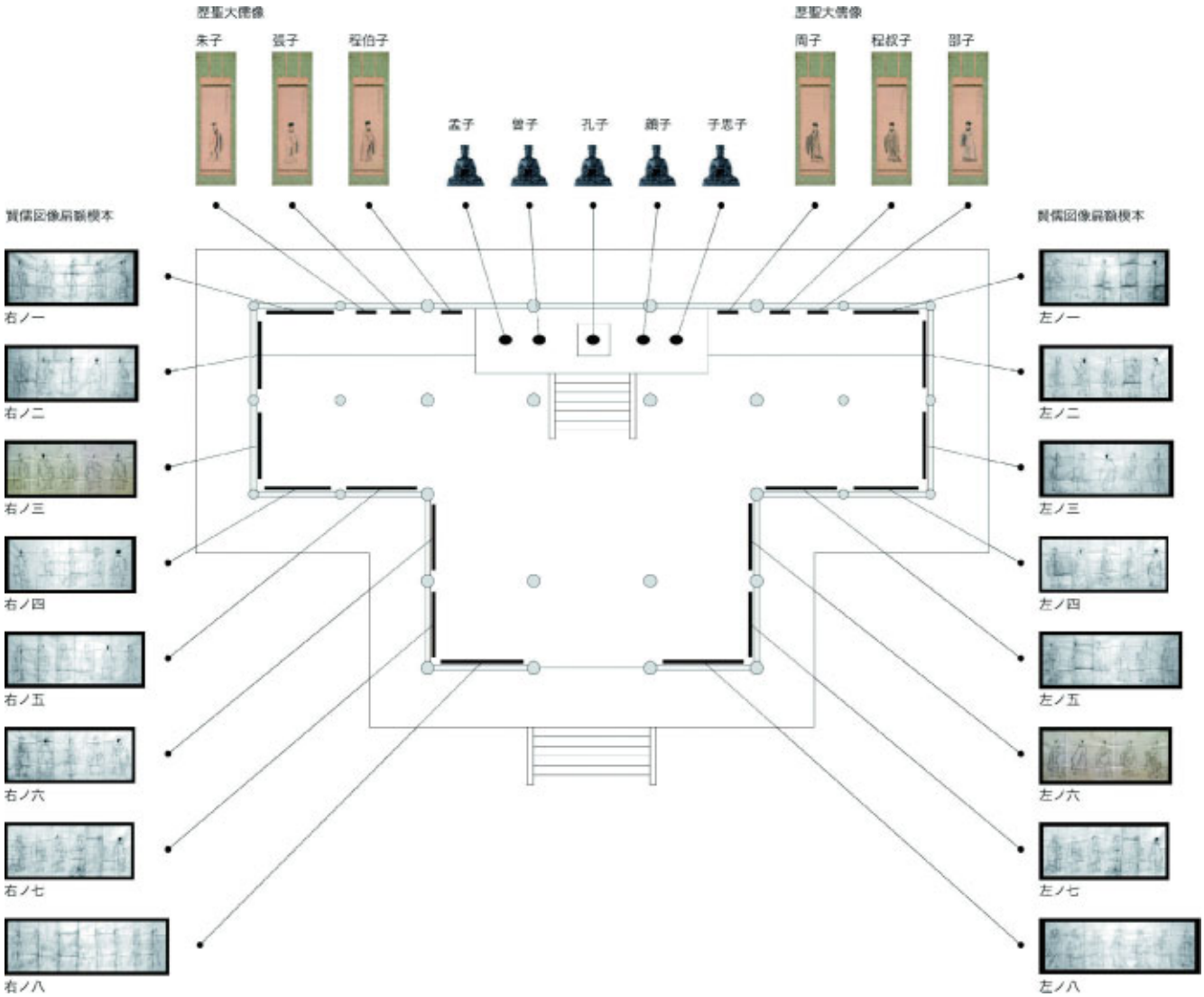


図5　復元した大成殿に「歴聖大儒像」6幅と「賢儒図像扁額」16面、孔子像等諸聖像プロット図

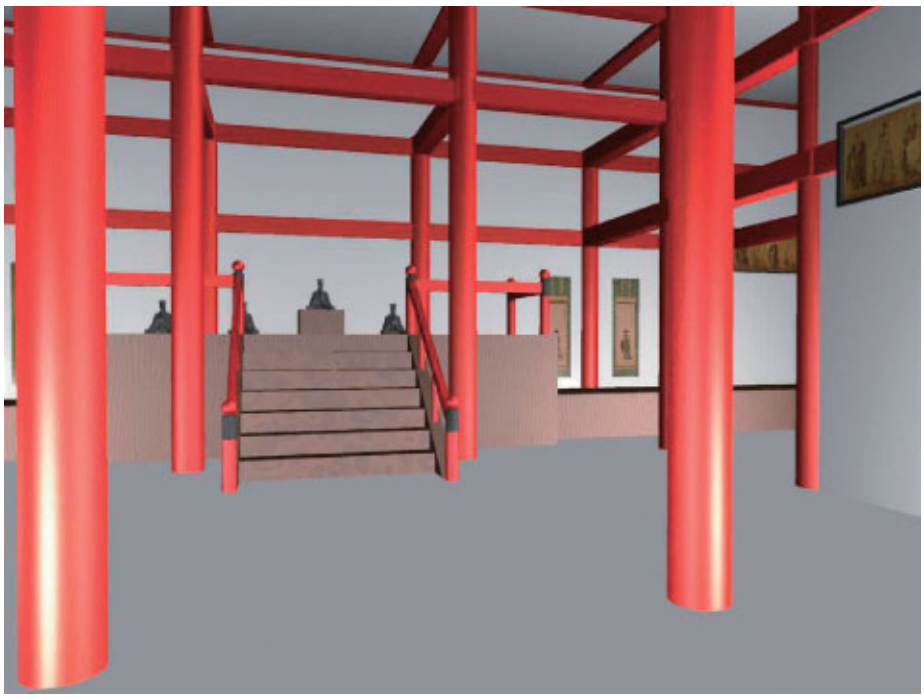


図6　復元した大成殿入り口からのイメージ

図7　復元した大成殿の正面イメージ

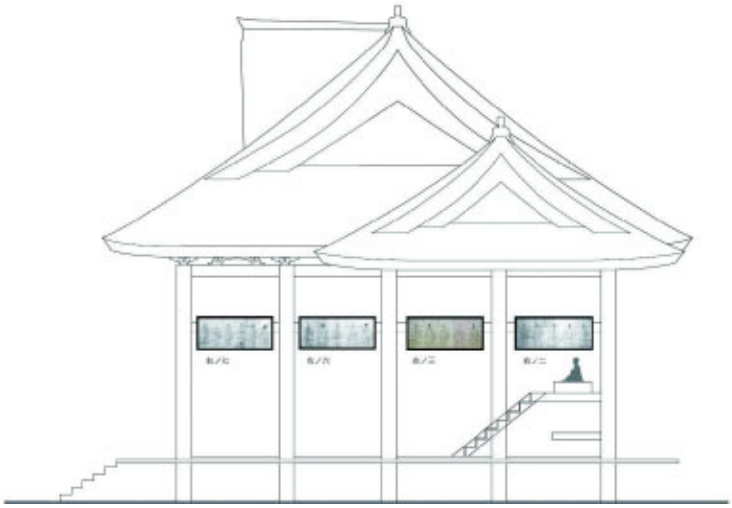


図8　右側面のイメージ

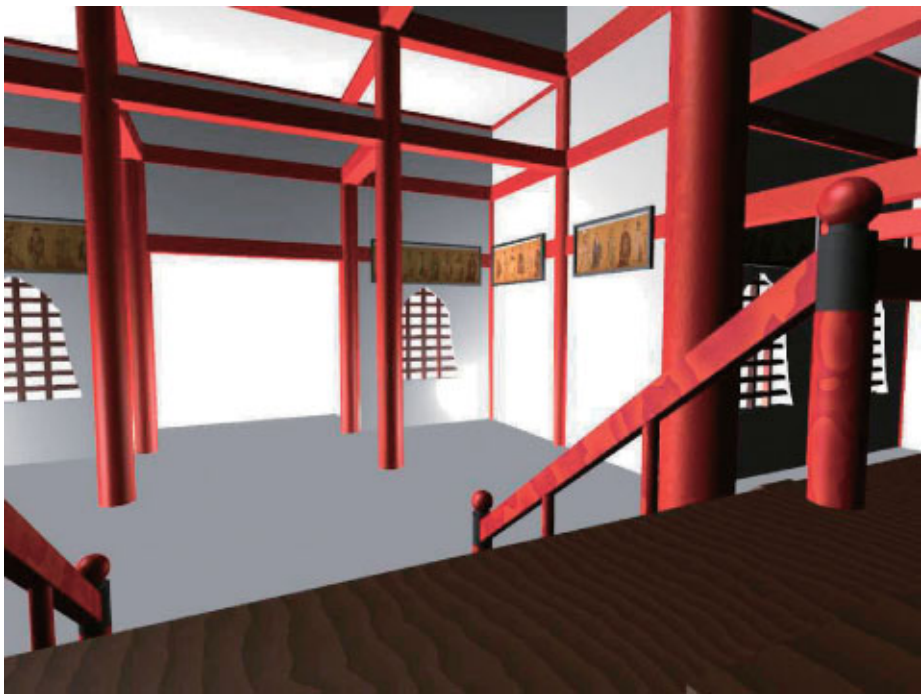


図9　復元した大成殿内部のイメージ

図10　復元した大成殿内部のイメージ

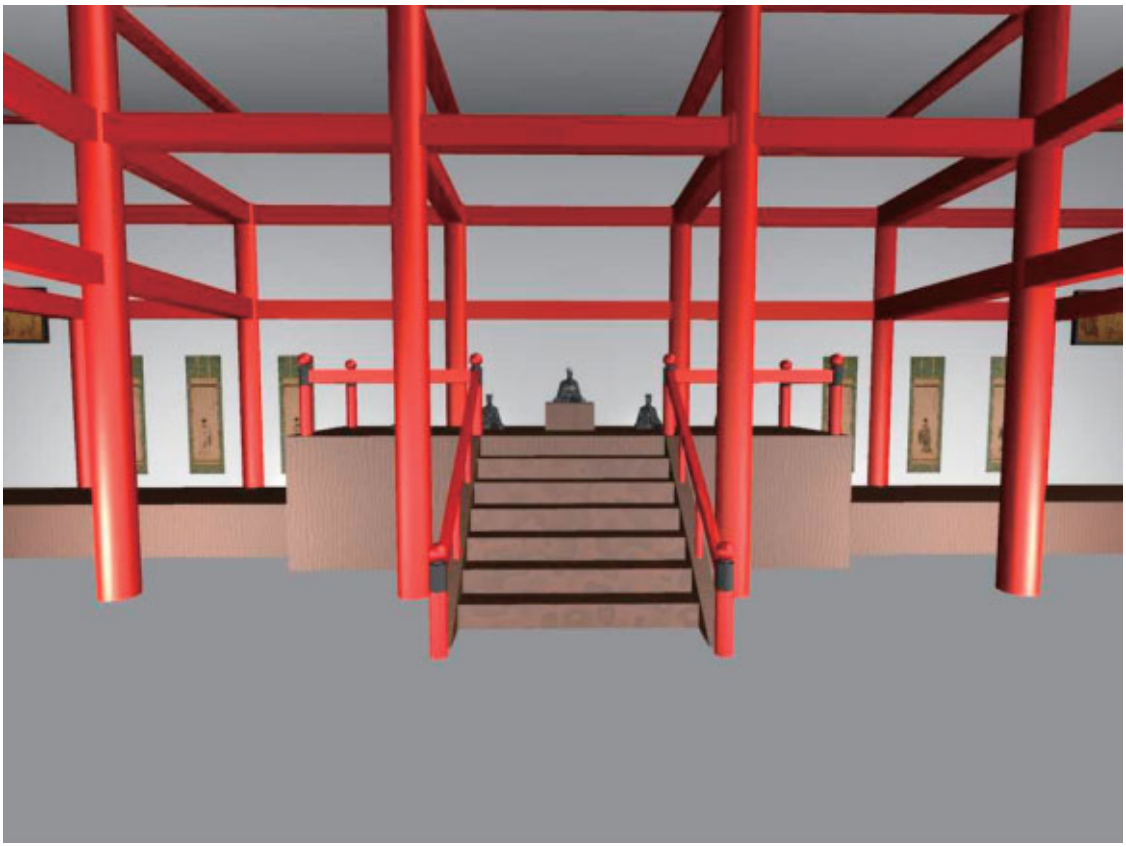


図11　復元した大成殿入り口からのイメージ

参考論文

守屋正彦「歴聖大儒像と探幽・尚信の新出屏風について」
『筑波大学附属図書館所蔵日本美術の名品―石山寺一切経、狩野探幽・尚信の新出屏風と歴聖大儒像―』
筑波大学附属図書館 2000年

守屋正彦「筑波大学本狩野尚信筆剡渓訪戴図について」
『藝叢17号』筑波大学芸術学研究室 2001年2月

守屋正彦「「子猷尋戴」における表現 ―筑波大学本狩野尚信筆《剡渓訪戴図》屏風について―」
『平成15年度三菱財団研究助成 美術史料による江戸前期湯島聖堂の研究 研究報告集』
筑波大学日本美術史研究室 2005年3月

伊藤たまき「筑波大学所蔵 田村直翁筆《架鷹図》について」
『筑波大学附属図書館所蔵 狩野探幽等江戸前期屏風の研究』筑波大学芸術学系守屋研究室 2002年3月

伊藤たまき「旧湯島聖堂大成殿内の孔子像に関する一考察」
『平成15年度三菱財団研究助成 美術史料による江戸前期湯島聖堂の研究 研究報告集』
筑波大学日本美術史研究室 2005年3月

中根恭子「湯島聖堂の賢儒図像扁額の研究 ―筑波大学所蔵《賢儒図像扁額模本》を通しての考察」
『平成15年度三菱財団研究助成 美術史料による江戸前期湯島聖堂の研究 研究報告集』
筑波大学日本美術史研究室 2005年3月

横島菜穂子「筑波大学所蔵「野外奏楽・猿曳図屏風」の図様について」
『筑波大学附属図書館所蔵 狩野探幽等江戸前期屏風の研究』筑波大学芸術学系守屋研究室 2002年3月

横島菜穂子「《湯島聖堂釈奠図》について」
『平成15年度三菱財団研究助成 美術史料による江戸前期湯島聖堂の研究 研究報告集』
筑波大学日本美術史研究室 2005年3月

横島菜穂子「狩野探幽筆《野外奏楽・猿曳図》屏風の図様について その2」
『平成15年度三菱財団研究助成 美術史料による江戸前期湯島聖堂の研究 研究報告集』
筑波大学日本美術史研究室 2005年3月

渡邊晃「李白観瀑図に関する一考察―筑波大学本狩野尚信筆李白観瀑図を中心に―」
『筑波大学附属図書館蔵 狩野探幽等江戸前期屏風の研究』筑波大学芸術学系守屋研究室 2002年3月

池田真理子「《賢儒図像扁額模本》(筑波大学本)の復元について」
『平成15年度三菱財団研究助成 美術史料による江戸前期湯島聖堂の研究 研究報告集』
筑波大学日本美術史研究室 2005年3月

木村浩「バーチャル湯島聖堂」
『平成15年度三菱財団研究助成 美術史料による江戸前期湯島聖堂の研究 研究報告集』
筑波大学日本美術史研究室 2005年3月

中原篤徳「旧湯島聖堂大成殿孔子像の復元研究」
『平成15年度三菱財団研究助成 美術史料による江戸前期湯島聖堂の研究 研究報告集』
筑波大学日本美術史研究室 2005年3月

野角孝一「《賢儒図像扁額模本》における人物描写に関する一考察」
『平成15年度三菱財団研究助成 美術史料による江戸前期湯島聖堂の研究 研究報告集』
筑波大学日本美術史研究室 2005年3月

協力者一覧

本特別展を進めるにあたり下記の方々の協力を得ました。
財団法人斯文会、史跡足利学校、東京国立博物館、翠川文子、清水義徳、太田圭、程塚敏明、大迫正一、末久真理子、伊藤加奈子、大久保範子、水野裕史、ニコロワ・ターニャ

研究組織

平成14年度
筑波大学附属図書館所蔵
狩野探幽等江戸前期屏風の研究スタッフ（本特別展展示品解説担当）
研究代表者
守屋正彦
リサーチアシスタント
伊藤たまき
中根恭子
横島菜穂子
渡邊晃

平成15年度三菱財団助成
美術史料による江戸前期湯島聖堂の研究スタッフ
守屋正彦
藤田志朗
柴田良貴
木村浩
伊藤たまき
中根恭子
渡邊晃
池田真理子
野角孝一
中原篤徳

筑波大学附属図書館特別展

江戸前期の湯島聖堂
—筑波大学資料による復元研究成果の公開—

2005年10月8日発行

編集　筑波大学日本美術史研究室、筑波大学附属図書館
発行　筑波大学附属図書館、筑波大学芸術専門学群
〒305-6577茨城県つくば市天王台1-1-1
029(853)2376
印刷　前田印刷

カタログ編集・レイアウト/ポスターデザイン　渡邊晃

筑波大学附属図書館特別展

江戸前期の湯島聖堂

—筑波大学資料による復元研究成果の公開—